

原著論文

ランガナータンにおけるファセット概念の展開

Development of the Concept of Facet in Ranganathan's Writings

緑川信之

Nobuyuki MIDORIKAWA

Résumé

Purpose: This study discusses the development of the concept of facet in Ranganathan's writings.

Method: Each writing of Ranganathan was chronologically investigated.

Results: The writings of Ranganathan on 'facet' can be divided into three phases. In the first phase, the concept of facet and the facet formula were established. The Colon Classification (CC) has two characteristics: (1) it adopts a notation consisting of plural independent elements, and (2) each element constitutes a facet. In the second phase, the concept of the fundamental category was modified. In the past, it was assumed that the fundamental category serves as a guide that a classifier uses in facet analysis. As the need to deal with detailed and complex subjects gradually increased, a new role was assigned to the fundamental category so that it could manifest a large number of facets. However, the use of the fundamental category also resulted in a new problem: consistency in classification practice could not be maintained. In the third phase, Ranganathan proposed a solution to this problem by using postulates and principles. In this phase, he also attempted to clarify the relationship between faceted classification and analytico-synthetic classification and the position of the CC in existing classifications. However, he changed his idea in each writing. This is because Ranganathan was not able to clearly distinguish among three points of view: the two characteristics (1) and (2) of CC and (3) classification enables facet analysis and synthesis of notations.

緑川信之: 筑波大学図書館情報メディア系, 305-8550 茨城県つくば市春日 1-2

Nobuyuki MIDORIKAWA: Faculty of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba, 1-2, Kasuga, Tsukuba, Ibaraki 305-8550, Japan

e-mail: midorika@slis.tsukuba.ac.jp

受付日: 2012年12月26日 改訂稿受付日: 2013年3月9日 受理日: 2013年3月20日

- I. 序論
- II. 第1期: 1933年-1945年
 - A. 1933年-1939年
 - B. 1944年-1945年
- III. 第2期: 1949年-1952年
 - A. 1949年-1950年
 - B. 1951年-1952年
- IV. 第3期: 1957年-1969年
 - A. 1957年-1960年
 - B. 1961年-1964年
 - C. 1964年-1969年
- V. 結論
 - A. ファセット概念の意味
 - B. ファセットと基本カテゴリーの関係
 - C. ファセット化分類法と分析合成型分類法の関係

I. 序 論

最近の分類論または組織化論のテキストブックでは、分析合成型分類法とファセット化分類法は同義であるとしている場合が多い。たとえば、“この〔ファセット化分類法〕の方法は分析合成型分類法としても言及される”¹⁾[p. 387]、“クラスを区分するには二つの方法がある。列挙型と、分析合成型あるいはファセット化である”²⁾[p. 175]、“これらの原理に基づく分類法はファセット化または分析合成型分類法と呼ばれる”³⁾[p. 312]、“ファセット化分類法は合成型分類法と呼ばれる。専門用語を使えば、分析合成型である”⁴⁾[p. 111]などである。しかし、ファセット化分類法=分析合成型分類法の代表とも言える Colon Classification (CC) の作成者である Ranganathan 自身は、必ずしもファセット化分類法と分析合成型分類法をまったくの同義とはみなしていなかった。

また、ファセット化分類法とはみなされていない分類法でも「ファセット」という用語は使われている。たとえば Dewey Decimal Classification 第17版の編集者の序文では、ある主題を複数の区分特性で区分することは第1版から行っており、「ファセット」という用語だけが新しく導入された、と述べている⁵⁾[p. 45]。そして、ファ

セットの例として、言語のクラスを「411-418 言語学 (の問題)」と「420-490 個々の言語」という区分特性で区分する例をあげている。同様に、分析合成型分類法とはみなされていない分類法にも「合成」の機能は備わっている。補助表を用いた合成や「〜と同様に区分しなさい」という指示による合成である。このように、「ファセット」も「合成」も、そうでない分類法と区分するための用語として適切なのかという疑問が湧く。

さらに、CCのファセット式では Personality, Matter, Energy, Space, Time が使われているが、これらはファセットではなく基本カテゴリーと呼ばれている。その一方で、Personality ファセットなどという呼び方をする場合もある。ファセットと基本カテゴリーはどのような関係にあるのだろうか。

本研究では、ファセット概念、ファセットと基本カテゴリーの関係、ファセット化分類法と分析合成型分類法の関係について、Ranganathan の考え方の変遷を検討した。Tennis も述べているように、Ranganathan は著作ごとに微妙に考え方が変化していく。“Ranganathan の分類理論の第一の特徴は、常に変化しているということである。1920年代後半に〔理論を〕自身の実践に反映させ始めたときから、1960年代の彼の最後の

出版物まで、彼の考えが進化しているのがわかる。これは、Ranganathan の分類理論が何であるのかを考えると、彼の仕事のどの段階を議論しているのかを明らかにしなければならないことを意味している”⁶⁾[p. 302]。そのため、本稿では Ranganathan の著作を発表年順に逐次的に分析する方法を採った。次章以下の章立ての区分も原則として著作の発表年順に並べているが、多少前後するものもある。なお、上記の Tennis も Ranganathan の分類研究をいくつかの段階に区分しているが、必ずしもファセットだけに注目しているわけではないので、本稿での区分と同じではない。

II. 第 1 期：1933 年-1945 年

この章では、CC の第 1 版から第 3 版までを対象とする。ただし、CC 第 3 版は 1950 年の出版であるが、後に述べるように、CC 第 3 版の内容は第 2 期に属する 1949 年以降の著作の成果を反映していない。そのため、本章の見出しを、CC 第 3 版の前に出版された 1945 年の著作（後述）までの「1933 年-1945 年」とし、CC 第 3 版もこの中に入れることにした。

1933 年以前に作成された主要な分類法には、Dewey の Decimal Classification (DDC; 1876 年 (第 1 版) から 1932 年 (第 13 版)), Cutter の Expansive Classification (EC; 1891-1893 年), Library of Congress Classification (LCC; 1901-1993 年), Otlet らの Universal Decimal Classification (UDC; 1905-1907 年), Brown の Subject Classification (SC; 1906 年) がある。また、1933 年から 1945 年の間には、DDC の第 14 版 (1942) と Bliss の Bibliographic Classification (BC; 1935 年 (試作版), 1940-1953 年) が出版されている。

筆者の別の論文「ファセット概念の源流」(以下、「源流」)⁷⁾では、CC 第 1 版から第 3 版のほかに、DDC, EC, UDC, BC を取り上げた。DDC と EC では記号が単一要素から成るのに対して、CC, UDC, BC では複数の独立の要素から成る記号を採用している。新しい分野に対応する新しい

項目を、内容的に最も近い既存の項目の記号の桁を延ばすことで作成し、その既存の項目の下位に位置づける方法がある。たとえば、37 の桁を延ばして 374 とするなどである。この場合、新しい項目 374 は、従来の項目 37 をある特定の観点 (特性) で細分してできる項目である。単一の要素から成る記号の場合は、観点は一つしか選択できない。一方、複数の独立の要素から成る記号の場合は、要素ごとに新しい項目を挿入できる。たとえば、二つの要素から成る記号 45: 63 があるとする。コロンは要素を区切る記号 (連結記号) である。新しい項目は 45 の桁を延ばして 452: 63 とすることもできるし、63 の桁を延ばして 45: 638 とすることもできる。両方を同時に行って 452: 638 としてもよい。このように、複数の独立の要素から成る記号は、複数の観点で細分することができる。UDC は図書館の蔵書だけでなく世界中のあらゆる種類の文献を分類するために作成されたため、もともと記号が単一の要素から成る DDC に基づきながらも、それを複数の独立の要素から成る記号に作り直し、詳細で複合的な主題も表現できるようにしたのである。BC や CC も、記号が単一要素から成る DDC や EC の限界を意識し、複数の独立の要素から成る記号を採用している。

この点から見ると、CC は UDC や BC と類似性をもっている。Ranganathan は、CC 第 1 版を作成する際に、UDC は当時利用できなかったのを参考にしなかったと説明している。ただし、その説明は著作によって微妙に異なる。1951 年の著作では、“分析合成型の要素をもつ最初の分類法は UDC であった。CC を設計しているときは UDC は利用できなかった (not accessible)。そのため、CC の設計におけるモデルとして利用することができなかった”⁸⁾[p. 99] と述べている。1965 年の著作では、“Universal Decimal Classification は英語では利用できなかった”⁹⁾[p. 11] というように、1951 年の著作での「利用できなかった」という説明が、「英語では利用できなかった」に変わっている。1933 年以前では、UDC はフランス語版しか出ていなかったことを

指している（英語版の一部が出たのは1936年）。1967年の著作では、“私はUDCを利用したことがなかった（no access to）が、その説明 [161] は読んだことがあった”¹⁰⁾ [p. 106] となる。ここにあげられている注 [161] には、“Sayersの Introduction to Library Classification (1935)。これはRanganathanがUDCについて最初に読んだものである”¹⁰⁾ [p. 606] と書かれている（Ranganathanは自分のことを「私」ではなく名前前で呼ぶことが多い）。一方、BCは試作版が1935年で、完成版が1940-1953年であるから、1933年のCC第1版よりも後の出版である。BCの概要¹¹⁾はすでに1910年に公表されていたが、CC第1版と同じ1933年にBlissの著作¹²⁾が出るまで、お互いの業績を知らなかったようである。1934年にBlissの方からRanganathanにお互いの著作を交換しようと提案している¹³⁾。その後、BlissはBC試作版でRanganathanのCCに言及し、RanganathanもProlegomena第1版¹⁴⁾でBliss（とRanganathanの師であるSayers）の著作から刺激を受けたと述べている。

以上を背景として、一部「源流」と重複するが、「源流」では取り上げなかった著作も含めて、第1期の著作を検討する。

A. 1933年-1939年

1. Colon Classification 第1版（1933年）

CCの第1版（以下、CC第1版）¹⁵⁾は1933年に出版された。RanganathanはCC第1版作成までの経緯を次のように回想している。“1924年10月から1925年6月まで、ロンドンのUniversity CollegeのSchool of Librarianshipで分類についてのコースを受講していたとき、Schoolの図書館でその当時利用できた分類表について、初めて数週間をかけて勉強した。それらは、Decimal Classification, Expansive Classification, Library of Congress Classification, Subject Classificationである。Universal Decimal Classificationは英語では利用できなかった。…分類の講師はW. C. Berwick Sayersだった。…授業時間外にファセット化分類法の考えをSayersと議論した。こ

の考えに対する彼の知的共感は励みになった。… Sayersは、任意の二つのファセット間に挿入する記号としてコロロン（:）を使う考えに同意した。これが、新しい種類の分類法の設計へと導く刺激的なインスピレーションとなった”⁹⁾ [p. 11-13]。

CC第1版ではまだファセットという用語は使われていない。しかし、ファセット概念に該当するものはすでに出てきている。

CC第1版は、まず知識全分野を主題区分（Subject Division）に分ける。主題区分には、「総記」、「A 科学（一般）」、「B 数学」、…「M 有用技術」、「N 美術」、「O 文学」、…「Y 社会学を含むその他の社会科学」、「Z 法律」などがある。「総記」の中には「1 書誌」、「2 図書館学」などがある。各主題区分は、それぞれいくつかの区分特性（Characteristics）に基づいて細目（Divisions）に区分される。「2 図書館学」の細目表の一部を第1図に示す。

2 LIBRARY SCIENCE

Divisions based on Problem or P Characteristic

- 1 Building and equipment
- 11 Stack room
- 12 Catalogue room
- 13 Reading room
- …

Divisions based on Library or L Characteristic

- 1 National and similar libraries
- 11 National library
- 12 Central library
- 13 Copyright library

第1図 Colon Classification 第1版の例¹⁵⁾

たとえば、主題区分の「2 図書館学」を、問題特性（Problem or P Characteristic）に基づいて区分すると細目「13 閲覧室」が得られ、図書館特性（Library or L Characteristic）に基づいて区分すると細目「11 国立図書館」が得られる。そして、これらの分類記号を連結記号コロロン（:）

を使って合成すると、「213:11 国立図書館における閲覧室」という主題を表現することができる(主題区分の後ろにはコロン記号を使わない)。

ここで、「問題特性に基づく細目 (Divisions based on Problem or P Characteristic)」は CC の第 3 版で「問題 [P] ファセット」と呼ばれるようになる。「図書館特性に基づく細目」も同様である。CC 第 1 版において、ファセットという用語は使われていないが、ファセット概念はすでに存在していたということができる。

では、Ranganathan はなぜこのようなファセット概念を考案したのであろうか。彼は CC 第 1 版の序文の中で、従来の分類法と CC との相違点を以下のように説明している。

コロン分類法はデューイの十進分類法や大冊の議会 [図書館] 分類法とは基本的な点で異なる。それら [の分類法] の明白な目的は、大部分のトピックに対して既製の分類番号を与えることである。そのため、それらの冊子の大部分は表 (Schedules) で構成されている。そして、それらの表はコロン分類法よりも数倍大きなものである。

しかし、コロン分類法では既製の分類番号をトピックに割り当ててのではない。コロン分類法の表は、いわゆる原基表 (Standard Unit Schedules) で構成されているといつてよいであろう。これらの原基表はメカノ器具¹⁶⁾の規格化された部品に対応する。子どもでも知っているように、これらの規格化された部品をいろいろな方法で組み合わせることができる。同様に、異なる原基表の番号を指定された順序組合わせで結合することによって、考え得るすべてのトピックに対する分類番号を構築することができる。この分類法においては、コロン (:) がメカノのボルトとナットの役割を果たしている¹⁵⁾。[p. xiii] (下線は引用者。引用中の [] 内は引用者による補記。以下同様)

ここでは、従来の分類法 (DDC や LCC など) は項目 (分類項目) が確定している表の中から特定の主題に対応する項目を探すのに対して、CC はいくつかの表 (原基表) の項目を組み合わせることで、表の中には存在しない項目をつくることことができる、と説明している (原基表が後のファセットの表ということになる)。

この相違点から、Ranganathan は、従来の分類表に対する CC の利点を二つあげている。それは、①区分特性ごとに区分が独立に行われるため、複合主題に対応した詳細な区分ができる、②区分特性による細目 (原基表) を使うことによって助記性 (Mnemonic) が高められる、ということである。

利点の①は、後に見るように、ファセット概念について考察する上で重要である。たとえば、DDC では、「8 文学」→「83 独語 (言語で区分)」→「832 独語の戯曲 (文学形式で区分)」というように、右側に記号を展開して細分化する。83 は 8 を言語で区分して「独語の文学」としているが、もしここで「独語」をさらに細分化して「低地独語の文学」という項目を作ろうとしても、83 の次は文学形式で区分されることになっているので、これ以上言語で細分化ができない。これは補助表などの合成を使っても同じである。しかし、もしこれが CC のように「83:2 独語の戯曲」となっていて、区分特性ごとに独立に細分化できるならば、「83 独語の文学」を言語でさらに細分化して「839 低地独語の文学」とし、これに文学形式の「2 戯曲」を組み合わせると、「839:2 低地独語の戯曲」という項目を作ることができる。このように、区分特性による細目 (原基表、後のファセットの表) による合成は独立に行われるが、補助表などによる合成は独立ではない、という違いがあるのである。

2. Prolegomena 第 1 版 (1937 年)

CC 第 1 版を公表した後、Ranganathan は分類の理論書を執筆した。それが *Prolegomena to Library Classification* の第 1 版 (以下、*Prolegomena* 第 1 版)¹⁴⁾で、第 3 版まで改訂されてい

る。全体が2部で構成され、第1部で分類の理論について説明し、第2部で各種分類表の比較を行っている。第2部の比較に取り上げられた分類表は、DDC, EC, LCC, SC, CCである。

第1部の理論編では、まず分類の一般理論が述べられる。アレイ (Array) とチェーン (Chain) もここで導入されている。それに続いて、分類の規準 (Canon) について詳しい説明が行われる。規準は、区分特性、アレイ、チェーン、用語 (Terminology)、記号法 (Notation) の五つの基本カテゴリー¹⁷⁾ごとに与えられる。たとえば、

区分特性に関する規準

- ・同時適用の規準：二つの区分特性を同時に適用するべきではない。
- ・永続性の規準：各区分特性は、分類表の目的が変わらない限り、範囲が明確で、不変であり続けるべきである。

アレイに関する規準

- ・包括性の規準：アレイ内のクラスは…全体を包括するべきである。
- ・相互排他性の規準：アレイ内のクラスは相互に排他的であるべきである。

などがあげられている。規準の他に、章としてまとまってはいないが、各所で分類の原理 (Principles) について説明が出てくる。

この Prolegomena 第1版で重要なのは、合成ができる分類法を合成型分類法 (Synthetic Classification) と呼んでいることである¹⁸⁾。Synthetic という用語はもともと Bliss が1929年の著作以来使っている用語で、Bliss の1910年の著作¹¹⁾以来のもう一つの重要な用語である Collocation (並置) をより具体化したものである。すなわち、関連する主題を近くにまとめるという機能である。ある区分特性に基づいて区分すると、別の観点から見て関連すると考えられる主題が離ればなれになってしまう可能性がある。関連しているかどうかは主観的かつ目的によって決められるが、それに柔軟に対応して関連する主題を近くにまとめられる分類法が Synthetic

Classification である、というわけである。本章冒頭の最後で「Ranganathan も Prolegomena 第1版で Bliss の著作から刺激を受けたと述べている」と書いたように、おそらく Ranganathan は Bliss の著作を読んで、Synthetic を実現する手段が「合成」であると考え、CCのような合成ができる分類法を Synthetic Classification と呼んだのではないかと考えられる。それに対して Bliss は、Prolegomena 第1版の書評¹⁹⁾の中で、Synthetic という用語は Analytic と対になる用語で、Ranganathan は補助表などによる合成という間違った意味で使っており、正しくは Composite を使うべきである、と指摘している。後に Ranganathan が合成型分類法から分析合成型分類法 (Analytico-synthetic classification) へ表現を変えるのは、この Bliss の指摘が影響しているかもしれない。

Prolegomena 第1版ではまた、CC 第1版で説明なしに用いられていた「区分特性」という用語について定義を与えている。

区分特性は、実体の類似または非類似を判定できる、少なくとも二つの実体が異なるものであると判定できる、属性または属性の複合である。

例：

1. どちらも属性ではあるが、身長は子どもの区分特性であるのに対して、顔に付いているもの [目、鼻など] はそうではない。顔に付いているものはすべての子どもに等しく共通している属性であり、それに関してすべての子どもは同じである。したがって、それは実体としての子どもの区分特性ではない¹⁴⁾。[p.9]

そして、CC 第1版で各主題区分を細分するために使用した区分特性を“区分特性の系列 (Train of characteristics)”²⁰⁾と呼び変えている。「区分特性の系列」とは区分特性が複数使われることを意味している。CC 第1版では区分特性は単数だったのに、なぜ複数にしたのかについ

ては説明がない。しかし、だいたい後のことになるが、Campbellによる用語集では、区分特性の系列について、“細目のチェーンを導くために使われる連続した区分特性”²¹⁾と説明されている。つまり、何段階か階層的に区分するために複数の区分特性が使われる、ということのようである。

Prolegomena 第1版のもう一つの重要な点は、CC第1版であげられていた従来の分類表に対するCCの利点「②区分特性による細目(原基表)を使うことによって助記性が高められる」に関連する言及である。実は、助記性を高めるという点では、補助表や「～と同様に区分しなさい」という手段でも同等の効果がある(「源流」⁷⁾参照)。しかし、CC第1版ではこのことに言及していない。ところが、Prolegomena第1版では、DDCの「～と同様に区分しなさい」も助記性を高める手段としてあげている¹⁴⁾[p.121-122]だけでなく、CC第1版においてもコロンの記号による原基表の連結以外に、地理区分表や時代区分表などの使用によって助記性が高められると述べている¹⁴⁾[p.127]。この時点でRanganathanは、原基表による合成と補助表などによる合成との類似性に気づいたように思われる。

ただし、CCのもう一つの利点「①区分特性ごとに区分が独立に行われるため、複合主題に対応した詳細な区分ができる」から見れば、原基表による合成と補助表などによる合成には本質的な違いもある。それは、原基表の項目どうしは独立に合成されるが、補助表などによる合成は独立が保たれた合成ではない、ということである。上述のように、原基表による合成ができる分類法を合成型分類法と呼び、補助表などによる合成ができる分類法についてはその名前前で呼んでいないのは、合成の独立性の有無によると考えられる。

3. Colon Classification 第2版(1939年)

Prolegomena第1版で分類理論を深めた後、CCの第2版(以下、CC第2版)²²⁾を出版している。ファセット概念に関連して重要なのは、区分特性の合成方法を表示していることである。第2図の例では「2 [P]: [L]」と表示されている。こ

2 LIBRARY SCIENCE

2 [P]:[L]

*Divisions based on the train of
Problem or P
Characteristic*

1 Building and equipment

11 Stack room

12 Catalogue room

13 Reading room

...

*Divisions based on the train of
Library or L
Characteristic*

1 National and similar libraries

11 National library

12 Central library

13 Copyright library

第2図 Colon Classification 第2版の例²²⁾

れは、主題区分の「2 図書館学」に、問題特性[P]を合成し、さらに連結記号コロンの(:)を使って、図書館特性[L]を合成する、という意味である。

この区分特性の合成方法の表示は、後に区分特性の式(Formula of characteristics)と呼ばれ、さらにファセット式(Formula of facets)と呼ばれるようになる。

B. 1944年-1945年

1930年代にCCの第1版と第2版および分類の理論書であるProlegomena第1版を出版したRanganathanは、1940年代半ばに豊富な実例を盛り込んだ分類の解説書と簡略な解説書を相次いで出版し、1950年にCC第3版を公表している(CC第3版をここに入れる理由は本章冒頭で説明した)。これらの著作の中でファセットという用語が使われている。

1. Fundamentals (1944年)

豊富な実例を盛り込んだ分類の解説書とは、*Library Classification: Fundamentals & Procedure*(以下、Fundamentals)²³⁾である。この著作の謝辞の中で、Palmerに原稿を読んでもらったことに対するお礼を述べている[p.7]。

Palmer は第二次世界大戦中にインドに従軍していた際に Ranganathan に会って共鳴し、後に Wells との共著²⁴⁾で Ranganathan の考えをインド以外に（特にイギリスに）初めて体系的に紹介した人とされている^{25, 26)}。Justice²⁷⁾は Palmer を「イギリスにおける Ranganathan の最も熱烈な崇拝者」と呼んでいる。Wells については、1949年に彼の下で働いた Ellis が、Wells は“Ranganathan 博士の仕事に体现されている分類の新しい理論の確信的な支持者である”²⁸⁾ [p. 180] と書いている。

この Fundamentals の中でファセットという用語を初めて使用している。

下記の 11 のメインクラスでは二つ以上の区分特性の系列に基づく細目が認められており、したがってまた、それら [のメインクラス] に属する特定の主題は同じ数のファセットを提示している²³⁾。[p. 63]

ここで述べられているメインクラスとは、化学、技術、神秘主義と超自然的経験、文学、言語学、宗教、心理学、地理、歴史、政治学、経済学である。これらのクラスでは区分特性の系列に基づいて区分して細目を作る。それによって、区分特性の系列の数と同じだけのファセットができる、というのである。たとえば、『(キリスト教の)神学入門』という図書の主題はメインクラス「宗教」に属する。このメインクラスは区分特性の二つの系列に基づいて区分される。それは宗教研究と宗教上の問題である。この図書は「キリスト教」に関するもので、それによって派生する問題は「神学」である。したがって、この主題は二つのファセットをもつ。それは、宗教ファセットとしての「キリスト教」と、問題ファセットとしての「神学」である。（ここでの例は Fundamentals の p. 65 から引用）

この Fundamentals ではファセットとは何かという直接の定義は与えられていない。上記の引用文の説明が間接的にファセットを定義している。つまり、「区分特性の系列に基づく細目」と「ファセット」が対応している。

このようにファセットという用語は Fundamentals で初めて導入された。しかし、CC 第 2 版で導入された区分特性の合成方法の表示は、区分特性の式と呼ばれ、まだファセット式という名称は使われていない。区分特性の式は多数の用例があげられているが、たとえば、E [P]:[S] がある²³⁾ [p. 73]。E は化学、[P] は問題ファセット、[S] は物質ファセットである。「E33:5」という分類記号は、「化学 (E) における有機物質 (5) の定量分析 (33)」という意味になる。このように、用語は区分特性の式のままであるが、式の中に連結記号としてコロンが使われている。そして、連結記号によってファセット間に独立性が与えられていると述べている。

連結記号 (Connecting symbol) の導入により各ファセットにいわば自律性が与えられ、したがって、コロン番号は独立したファセットの連合体のようである…²³⁾ [p. 337]。

CC 第 1 版で見た (A 節 1 項参照)、他の分類法に対して CC がもつ利点の一つ「①区分特性ごとに区分が独立に行われるため、複合主題に対応した詳細な区分ができる」が、ここでも強調されている。

しかし、その一方で、DDC にもファセットがあることを認めている。DDC の第 14 版 (Fundamentals の 2 年前の 1942 年に出版された) には「表 3 言語と文学」と「表 4 言語区分」があり、表 3 にリストされている言語の項目および文学の項目は、表 4 にリストされている言語区分の分類番号を加えることで細分できることを説明している。たとえば、表 3 の「429.7 アラビア語」に表 4 の「1 正字法」を加えると「429.71 アラビア語の正字法」ができる。そして、これを「ファセット分析! メカノの原理!!」と呼んでいる²³⁾ [p. 333]。メカノとは CC 第 1 版で言及したメカノ玩具のことである。このように、Ranganathan は DDC の合成もファセットの合成であるとしているのである。たしかに、ファセットとは、「区分特性の系列に基づく細目」のことであるから、

言語という区分特性に基づく「表3 言語と文学」と「表4 言語区分」はファセットと言えるであろう。

問題は、DDCの「ファセット」がCCのファセットのように独立性を与えられているかどうかである。「メカノ原理」と呼んでいるということは、合成されるものどうしの独立性を認めているようにも思える。ただ、独立性を与えるためにはコロンのような連結記号が必要であるが、DDCの小数点を連結記号として使えばよいというPalmerの提案を紹介している²³⁾[p. 426-428]ことから、いまのままでDDCの「ファセット」が独立性を与えられているのではなく、適切な連結記号が使用されれば独立性が得られる、と考えていたように思われる。

Fundamentalsには基本カテゴリー(Fundamental categories)という用語も出てくる。

私たちはファセット分析に関わる最後の点に到達した。異なる主題のファセットを調査することによって、それらはすべて五つの基本カテゴリーのいずれかに関連していることが明らかとなった。それは、Time, Space, Energy, Matter, Personalityである。どのような分析も最終的にはそこに行き着く。したがって、分類の上級コースの学生は、背景にあるそれら[基本カテゴリー]の存在に慣れてきて、それらに関連させて自分の考えを明確にすることができれば、助けになるであろう。…まずTimeから始めよう。これはおそらく、五つの中で最も抽象的である。…SpaceはおそらくTimeより具体的であろう。しかし、その他のカテゴリーほどではない。…カテゴリーEnergyは他のものよりもずっと多くの使い道がある。これに関連するファセットをもたないクラスはほとんどない。…カテゴリーMatterにおいては、比較的抽象性が少なく、かなり具体性のあるものに出会う。…五つ目の基本カテゴリーであるPersonalityは、上で述べたように、非常に一般化した意味で使うべきで、分析不能であ

る。それは注意深く全体として扱わなければならない²³⁾。[p. 429-434]

このように、五つの基本カテゴリーPMESTもFundamentalsで初めて導入されている。ただし、この後に出版されるCC第3版では使われていない。それどころか、このFundamentalsでも上記の説明があるだけで、実際には使われていない。先ほどの『(キリスト教の)神学入門』の例で見たように、「宗教ファセット」や「問題ファセット」というメインクラスに特有のファセットを使っているのである。上の引用文にもあるように、初心者がファセット分析(課題となっている主題に属するファセットが何であるかを分析する行為)を行う際の手引きのような役割を想定していて、一般化したファセット式(この時点ではまだ「区分特性の式」)で使うことは考えていなかったと思われる。基本カテゴリーがファセット分析の補助的手段ではなく本質的な役割を与えられるようになるのは、CC第3版より後のことである(III章参照)。

なお、Prolegomena第1版で詳しく説明された分類の規準と原理が本書でも提示されている。

2. Elements第1版(1945年)

*Elements of Library Classification*の第1版(以下、Elements第1版)²⁹⁾は、インドの大学での講義録をもとにした冊子である。Prolegomena第1版やFundamentalsに比べると簡潔な内容になっているが、ファセット分析という章もある。そこでは、“Fundamentalsは「ファセット」…の概念を導入した。…[この]概念…は、「区分特性の系列」…よりも洗練されていることがわかった”²⁹⁾[p. 75]と述べている。つまり、Fundamentalsでは間接的な表現であったが、ここでは「区分特性の系列」が「ファセット」という用語で置き換えられたことを明記している。また、Fundamentalsではまだ区分特性の式と呼ばれていたが、このElements第1版ではファセット式と呼ばれている。基本カテゴリーについてはまったく言及がない。Prolegomena第1版や

Fundamentalsと同様に、規準は一つの章として、原理は各所で説明されている。

3. Colon Classification 第3版 (1950年)

RanganathanがCCでファセットという用語を用いたのは第3版(以下、CC第3版)³⁰⁾が最初である。CC第3版では、まず、すべての主題がメインクラス(Main Class)に分けられる。メインクラスはCC第1版の主題区分に該当するもので、項目もほぼ同様に「1 to 9 総記」, 「A 科学(一般)」, 「B 数学」, …「M(その他の) 応用化学, 有用技術」, 「Δ 超自然的経験と神話的解释」, 「N 美術」, 「O 文学」, …「Y 社会学を含む(その他の) 社会科学」, 「Z 法律」となっている。メインクラスの下位クラスをカノニカルクラス(Canonical Class)と呼ぶ(カノニカルクラスは従来の学問領域を指す)。そして、ファセットは次のように定義されている。

区分特性の系列に基づく、あるメインクラスまたはカノニカルクラスの区分肢³¹⁾の総体(Totality of the classes)は、その[クラスの]ファセットの一つを構成する³⁰⁾。[pt.I: p. 41]

メインクラスやカノニカルクラス(以下、特に断らない限り、両者を総称して「クラス」と呼ぶことにする)をある区分特性の系列に基づいて区分したとき、それによってできる区分肢の総体をファセットと呼ぶ、ということである。つまり、ファセットとは「区分肢の総体」である。ただし、単なる項目の寄せ集めではなく、特定の区分特性に基づく区分肢の総体であり、ファセット内の区分肢間にはその区分特性に関わる共通の性質がある。

ファセットの合成方法の表示はCC第2版で導入され、Fundamentalsで区分特性の式という名称を与えられ、Elements第1版でファセット式と呼ばれるようになったが、このCC第3版でもファセット式という用語が使われている。各クラスは、ファセット式に基づいて区分される。ファセットおよびファセット式はクラスごとに異なっ

2 LIBRARY SCIENCE

2 [P]:[L]

Foci in

Problem or P

Facet

1 Building and equipment

11 Stack room

12 Catalogue room

13 Reading room

…

Foci in

Library or L

Facet

1 National and similar libraries

11 National library

…

2 Public library

21 Rural library

25 City library

第3図 Colon Classification 第3版の例³⁰⁾

ている。たとえば、「2 図書館学」クラスにおいては、「問題(P) ファセット」と「図書館(L) ファセット」があり、それらのファセットごとに区分した後で、ファセット式2 [P]:[L]によって合成される(第3図)。たとえば、「国立図書館の閲覧室」という主題の場合、まず、問題ファセットによって「閲覧室」に区分される。「閲覧室」の分類記号は「13」である。次に、図書館ファセットによって「国立図書館」に区分される。「国立図書館」の分類記号は「11」である。これらの記号をファセット式に代入すると、「国立図書館の閲覧室」という主題の分類記号「213:11」が得られる。

基本カテゴリーは使用していないし、言及してもしない。Fundamentalsで初めて基本カテゴリーの概念を導入しておきながら、Fundamentalsの中で実際に使用していない理由は、本節1項のところで、初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を想定していたからであろうと推測をした。しかし、Fundamentals出版の1944年以降、CC第3版出版の1950年ころまでの間に、Ranganathanは、図書館の蔵書だけでなく学術雑誌の論文なども分類の対象にするためには、基本カテゴリーの積極的な活用が必要だといこ

とに気づいていた。この問題については次章で検討するが、それではなぜCC第3版で使わなかったのかについて、以下の文が推測の鍵を与えてくれる。

最初は選択ファセット (Optional facet) という新しい概念に関する作業を完成させるつもりだった。これは、ドキュメンテーションサービス、雑誌の抄録作業、それに事務所の記録物や博物館・ワークショップの資料をファイリングし整理する際に生じる深い分類 (Depth classification) の要求を満たすために開発されたものである。それをこの版の中に組み込んで、1950年代後半に発表しようと考えていた。… [しかし] 第2版はかなり突然に売りきれとなってしまった…。そのためこの版は、物理学、文学、教育の表以外には多くの変更を行わずに公表した³⁰⁾。[pt. I: p. 14]

基本カテゴリー自体については何も述べていないが、この引用に出てくる選択ファセットや深い分類は基本カテゴリーの使用と密接に関連している。したがって、基本カテゴリーに関して、理論的にはある程度研究が進められていたと考えられる。それにもかかわらずCC第3版で使用しなかったのは、急いで出版しなければならなかったため採り入れている余裕がなかったからであると推測される。基本カテゴリーがCCで使用されるようになるのは第4版からである。

III. 第2期：1949年-1952年

前章では、1933年から1945年の期間に発表された著作を検討した。この期間は、ファセットおよびファセット式概念が確立されていく過程として特徴づけることができる。本章では、1949年-1952年の期間に発表された著作を検討する。短い期間であるが、分類に関してRanganathanの最も生産的な時期である。

前章の冒頭で、UDC、BC、CCが複数の要素から成る記号を採用したのは、詳細で複合的な主題を

表現できるようにするためであると述べたが、第二次世界大戦を経た二十世紀半ばにはこの要求がますます高まった。特にそれは科学技術文献の流通、蓄積、検索の領域で強く求められ、分類もそのための手段として重要視される。1948年に開催されたRoyal Society Scientific Information Conferenceは科学技術情報の流通に関する重要な国際会議であるが、分類に関する作業部会も含まれていた³²⁾。また、この会議がきっかけでイギリスに分類研究グループ (Classification Research Group: CRG) が結成され、その後の分類および情報検索に重要な影響を及ぼしていく²⁷⁾。CRGはRanganathanのファセット概念も独自に展開していく。ただし、CRGはメンバー全員で何かまとまったことを行うのではなく、集まって協議はしながらも各自がそれぞれの理論や実践を進めていくという緩やかな連合体である。前章でPalmerとWellsがRanganathanの考えをインド以外に初めて体系的に紹介したと述べたが、彼らもCRG結成時のメンバーとなった。

情報検索に適した分類法としてUDCを採用するのがよいか、それとも、新しい分類法を開発すべきかという問題は、Royal Societyの会議でも議論され、その後も継続的に研究が続けられた。この問題を巡って、1950年頃から、UDCを推進するFédération Internationale de Documentation (FID: UDCの作成者であるOtletらによって設立されたInstitut International de Bibliographieの後継機関)、新しい分類法の開発に取り組むCRG、CCを図書館の蔵書以外の様々な文献にも適用できるように改良を続けるRanganathanという三つの主要な流れが生じた。ただし、FIDも新しい分類の検討を同時に行っていた。“[1946年に] GrolierがFIDの分類委員会を、UDCを専門に扱う十進法の委員会と分類法一般の委員会とに二分することを提案した。分類法一般については、新分類理論を考察し、非十進システムを研究し、各国における各種の研究成果をもちよって結論を出すことをその目標とした。…比較分類法委員会という名称になった委員会は、1948年に第1回会合をもち、(a) 一般分類原則の比較、

(b) 専門主題の分類法比較をさしあたり行うこととした”³³⁾[p. 162-163]。CRGやRanganathanの研究もこのFIDの動きと無関係ではない。Ranganathanは上記の比較分類法委員会(Comparative Classification Committee)の後継であるFID/CA委員会について次のように述べている。“1950年に、FIDは分類の基礎を研究する必要性を感じ、そのために、分類の一般理論(General Theory of Classification)に関するFID/CA委員会を立ち上げた。私は委員長(Rapporteur-General)を依頼され[た]…”³⁴⁾[p. 30]。FID/CAは1961年にFID/CR(Classification Research)と名称を変える。

一方で、すでに図書館界では国際的に普及していたDDCも、補助表を充実させることで蔵書数の増加への対応と図書館の蔵書以外の資料への対応を改訂ごとに進めていった。これらに共通するのは、詳細かつ複合的な主題にいかに対応するか、という問題である。こうした状況を背景として、第2期の著作を検討する。

A. 1949年-1950年

1. Self-perpetuating (1949年)

上記のように、五つの基本カテゴリーPMESTが初めて導入されたのは1944年出版のFundamentalsにおいてである。しかし、そこではまだ、初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を想定して、一般化したファセット式(当時は区分特性の式)で使ってはいない。しかし、基本カテゴリーに関する研究はFundamentals以降も続けられていた。1949年の著作Self-perpetuating scheme of classification(以下、Self-perpetuating)³⁵⁾では、以下のように述べている。

ファセット分析の根底にある基本カテゴリーは、…伝統的なカテゴリーtime, space, energy, matter, personalityである。異なる主題のファセットは異なる体現(Manifestations)ではあるが、それ[基本カテゴリー]を通じてすべて関連させることができる³⁵⁾。[p. 232]

基本カテゴリーは主題によらず共通のものであるが、同じ基本カテゴリーに関連するファセットであっても主題によって異なる現れ方をする、ということである。つまり、これまで主題ごとに異なるファセットを使ってきたが、それらはいくつかのカテゴリーにまとめることができる。そのカテゴリー(基本カテゴリー)がTime, Space, Energy, Matter, Personalityの五つである。ファセットは(基本カテゴリーの)体現である、という位置づけが与えられている。この点については後の著作でより明確に述べられる。

このように、基本カテゴリーについて言及してはいるが、ファセット式では使っていない。

Colon Classificationでは、構文が明確な規則によって規定されていて、それはファセット式と呼ばれる形式で表現されている。…たとえば、肺の結核の病因=(医学)(肺の):(結核の):(病因)=L43:421:2である。最初のコロンは器官ファセットから問題ファセットへの移行を、そして二つ目のコロンは問題ファセットから処理ファセットへの移行を指示している³⁵⁾。[p. 227]

このように、ファセット式では、あいかわらず器官ファセットや問題ファセットが使われている。

こうしたことから、基本カテゴリーはFundamentalsのときと同様に初心者のための手引きという位置づけを出ていないと思われる。ただし、CC第3版にも出てくる選択ファセットがここでも言及されている。

[雑誌論文の中にしか出てこない主題や図書のこれまでにない大幅な増加という状況のもとで]現在のドキュメンテーション業務と将来の図書分類のためにより強力な記号法を案出して、分類番号を簡潔にしなければならない。ここ数ヶ月の間に、Delhi Schoolは私たちが選択ファセットと呼ぶものを思いついた。それはこの問題に成功裏に対応できることを約束しているように見える。選択ファ

セットの連結記号はドットである³⁵⁾。
[p. 230]

ここでも、選択ファセットとは何かや基本カテゴリーとの関係が説明されていない。実は、この選択ファセットは、本著作のタイトルでもある「自己永続性 (Self-perpetuation)」とも関係がある。

自己永続性は、新しく形成された知識分野に対する適切な分類番号の構築は、思慮分別のある分類作業 (Classifier) ならだれでも可能である、ということの意味する。彼はその分類番号に関して分類表作成者 (Classificationist) に聞く必要はない³⁵⁾。
[p. 230]

Colon Classification は自己永続性の可能性を実証してきた。それ [CC] は他の分類表よりも、はるかにおおきな自律性を分類作業者に与えている³⁵⁾。[p. 231]

新しい分野が形成されたときに、それに対応する新しいファセットを CC に採り入れることができ、それは分類表作成者による改訂を待たずに、現場の分類作業者が自分で行えるということである。これを自己永続性と呼んでいる。選択ファセットの意味もここからある程度推測される。

この著作でもう一つ重要な点は、Prolegomena 第1版で使った合成型分類法という用語を、列挙型分類法と対比させていることである。この用語は Wells によるもののようである。

Wells 氏によって考案された用語を使うなら、Library of Congress Classification と Decimal Classification は列挙型 (Enumerative) である。すなわち、それらはすべての可能な特定主題をリストしそれに分類番号を与えようとする。…非列挙型 (Non-enumerative) または合成型と呼ぶべき Colon Classification では、大部分が複合的な概念から導かれる特定

主題を列挙せずに、基本的な要素的概念だけを列挙して、それらのいくつかを組み合わせることで特定主題を構成する³⁵⁾。[p. 232]

ここでもまだ分析合成型という表現は使われていない。また、これ以上の詳しい説明はない。

2. Philosophy (1951年)

この項で取り上げる著作 *Philosophy of Library Classification* (以下、Philosophy)³⁶⁾ は 1951 年の出版であるが、序文の日付は 1949 年 2 月となっている。また、次項で取り上げる 1950 年出版の著作中で、この Philosophy が 1950 年の出版として言及されている。こうしたことから、何らかの理由で出版は 1951 年になったが、実際はもっと早く、遅くとも 1950 年には完成していたものと考えられる。内容から見ても、次項の著作よりも以前のものと思われる。そのため、出版年にかかわらずこの項で取り上げることにする。

まず、基本カテゴリーという考えは Wells と Palmer との共同作業から生まれたことが述べられている³⁷⁾。

私たち [Wells と Palmer と自分] は、ファセット分析に関わる基本的な点によく到達した。異なる主題のファセットを調べた結果、それらはすべて五つの基本カテゴリー Time, Space, Energy, Matter, Personality のどれか一つと関連させることができた³⁶⁾。
[p. 56]

次に、ファセット式であるが、やはりまだ基本カテゴリーは使われていない。しかし、これまで連結記号はコロンしか使われていなかったが、もう一つ、ドットも使われるようになった。

ファセット式 2[L].[D].[G].[C]:[P].[S].[M]
図書館学 [図書館の種類].[部署].[地理区分].[時代区分]:[問題].[主題].[資料]

ここで、最初の三つと最後の二つの連結記号

は、コロンの代わりにドットである。まず、この変更の理由を説明する。すべての連結記号がコロンであるとしよう。そうすると、規則によって、後に続くファセットが空席 (vacant) の場合でもコロンは保持されなければならない。そうすると、いくつかのファセットが空席の場合、複数個連続するコロンが生じてしまう。…例えば、248:::75 [政府機関 (48) の図書館 (2) におけるドキュメンテーションサービス (75)]…このコロンの重なりはとても不便であろう³⁶⁾。[p.111-112]

CC 第3版まではファセット式は固定されていて、当該の主題に存在しないファセットは空白とされた。ファセットが空白のときに連結記号まで取り除いてしまうと、その次のファセットと連結してしまうことになる。連結記号はすべて同じコロンなので、どのファセットが空白となり、どのファセットが残って連結しているのかがわからなくなる。それを防ぐために、連結記号コロンはファセットが空白の場合でも残すという方法をとっていた。しかし、これは好ましくないため、以下の方法を考えたのである。

通常ファセット式で規定されている次元の間または後に、外部から仮の次元を付け加えることができなにか試してみた。言い換えれば、選択ファセットのための手段を講じることを求めたのである。それらのどれかが不在の場合でも、その連結記号を保持して不在であることを示す必要はない、という意味で私たちはそれらを選択 (optional) と呼んでいる。私たちはこの可能性を前提とし、選択ファセットに対する連結記号としてドットを設定した。…選択ファセットを挿入したファセット式を、拡張されたファセット式と呼ぶことにする³⁶⁾。[p.112]

すなわち、必ず存在するファセットはあらかじめファセット式に入れておいて、それらはコロン

で連結する。必要に応じて加えるファセットの連結記号はドットで表すことにする。そうすれば、ファセットが存在しなければその連結記号であるドットも記載されない。このようにして拡張されたファセット式が、先ほどの例の2 [L].[D].[G].[C]:[P].[S].[M] である。この例では、必ず存在するファセットは [P] だけである。たとえば、政府機関の [L] 図書館における [2] ドキュメンテーションサービス [P] は、248:75となる。このように、必要に応じて挿入されるファセットが選択ファセットで、その連結記号はドットである。

前項で見たように、新しい分野が形成されたときに、それに対応する新しいファセットを CC に採り入れることができることを自己永続性と呼んでいたが、選択ファセットはそのために必要とされたのである。

3. Coding (1950年)

Ranganathan は UNESCO の報告書 *Classification, Coding and Machinery for Search* (以下、Coding)³⁸⁾ で、図書館分類法をドキュメンテーションの機械化のために利用するにはどのような性質が必要かを論じている。

この著作では、基本カテゴリーについて以下のように述べている (基本カテゴリーではなく基本要素と呼んでいるが、意味は同じである)。

すべてのファセットは、五つの基本要素 (Fundamental elements)—Time, Space, Energy, Matter, Personality—のどれか一つの体現と見なされる。…異なる主題においては、それらは異なる名前と機能を体現する³⁸⁾。
[p.21]

本節1項で見た Self-perpetuating では「異なる体現としてのファセットが基本カテゴリーを通じて関連させられる」という説明であったし、2項の Philosophy では「異なる主題のファセットは基本カテゴリーのどれか一つと関連させられる」という説明であった。本項の Coding で初め

て「ファセットは基本カテゴリーの体现である」という表現がなされている。以後、この表現が使われることになる。前二者は「ファセットが先にあって、それらが基本カテゴリーでまとめられる」という意味であるが、後者は「基本カテゴリーが先にあって、そこからファセットが体现する」という意味になる。この違いは大きい、この著作ではまだその違いの意味を明らかにするところまで踏み込んでいない。

次に、各基本カテゴリーに異なる連結記号を与えている。ただし、Time と Space は他の手段で区別をするので、同じ連結記号を使うとしている³⁹⁾。

Time . (終止符)
 Space . (終止符)
 Energy : (コロン)
 Matter ; (セミコロン)
 Personality , (コンマ)

Philosophy ではコロン以外の連結記号はドット（ここでは終止符と呼んでいる）だけだったが、ここでは、セミコロンとコンマも導入されている。しかも、個別ファセットの連結記号ではなく、基本カテゴリーの連結記号である。先に、ファセットと基本カテゴリーの関係が今までと逆になったことを述べたが、連結記号に関しても基本カテゴリーに視点を移していることがわかる。

ただし、まだこの著作でも、基本カテゴリーを使ったファセット式は示されていない。また、次のように述べていることから、基本カテゴリーはまだ、分類作業者がファセット分析を行う際の手引きという位置づけであると考えられる。

このアプローチは、新しいファセットを提示する新しい主題が生まれたときに、分類作業者が、それら [のファセット] が体现となるそれぞれの基本要素を認識し、それらの中の各細目を決定し、それをファセット式ですべてに指定されているファセットに属する細目の中の適切な位置に挿入することを可能にす

る。誰が分類作業者であっても、同じ新しいファセットを認識し、同じ位置を指定するであろう³⁸⁾。[p. 21]

この著作でもう一つ重要な点は、初めて分析合成型分類法という用語が使われていることである。ここでは、既存の分類法を以下の三種類に分けている³⁸⁾ [p. 5-6]。ただし、いずれも詳しい説明はない。

- ・列挙型分類法: DDC
- ・列挙型と分析合成型のハイブリッド型分類法: UDC

“DC と UDC の主な相違点は、前者が本質的に列挙型であるのに対して、後者はこの列挙型の DC の中核に多少の分析と合成 (analysis-cum-synthesis) を加えた”³⁸⁾ [p. 6]。

- ・分析合成型分類法: CC

B. 1951 年-1952 年

前節では、ファセットと基本カテゴリーとの関係、選択ファセットと自己永続性（新しい主題に対応するファセットの挿入）との関係について見てきた。しかし、まだ基本カテゴリーと選択ファセットや自己永続性との関係が明らかになっていない。

1. Bibliographic Organization (1951 年)

シカゴ大学の Graduate Library School が開催した 1950 年の年次大会（全体テーマは Bibliographic Organization）で、Ranganathan も CC についての発表を行っている（以下、Bibliographic Organization⁴⁰⁾）。

この著作では記号の硬直化 (Rigidity) を取り上げている。まず、分類法にとって硬直化が問題であることを指摘する⁴¹⁾。

記号法の硬直化は分類にとって致命的である。記号法の硬直化を打ち破ることによってのみ分類は生き残ることができ、知識の領域における特定主題の豪雨による閉じこめから

脱出することができる。分類の歴史全体が硬直化の打破の歴史である⁴⁰⁾。[p. 96-97]

ここで言われている硬直化とは、新しい主題を既存の分類法にうまく取り込めないことを指していると思われる。それは、硬直化を打ち破る従来の三つの方法として、①項目に空位を設ける、②小数点方式を採用する、③オクターブ記号法 (Octave notation) を使用する、をあげていることから推測される⁴⁰⁾ [p. 98-100]。①の空位とは、新しい主題に対応する分類項目を入れるための空位である。②の小数点方式とは、細目を展開する、すなわち記号の桁を延ばすことで、新しい主題に対応する項目を用意するということである。数字の整数は間が埋まるとそれ以上増やせないが、小数ならば小数点以下いくらでも桁を延ばして数を増やすことができることから、この方式を小数点方式と呼んでいる。③のオクターブ記号法とは、DDCのように、1~8までの数字を主要な言語にあて、それ以外のマイナーな言語を9に入れることである。9の中には、さらにまた重要度に応じて、91~98に入れる言語と、それ以外の99に入れる言語とに分けられる。これを繰り返すのがオクターブ記号法である。以上の三つの方法は、いずれも新しい主題を挿入するために使われると述べていることから、硬直化とは新しい主題をうまく取り込めないことだと言える。

そして、CCのファセット化記号法 (Faceted notation) は、硬直化を打ち破る第四の方法であるという⁴⁰⁾ [p. 100]。これは、CC第1版で他の分類法に対するCCの利点としてあげられた「①区分特性ごとに区分が独立に行われるため、複合主題に対応した詳細な区分ができる」から来るものである (II章A節1項参照)。そこでは複合主題に対応できるとされているが、柔軟な細分ができることから、新しい主題への対応も可能であるというのがRanagnathanの主張である。

しかし、ファセット化記号法でも硬直化があるという。

それは、ファセット式内でのファセットの順

序に関係している。Colon Classificationの出版済みの版 [第3版まで] では、ファセット式は必須のファセットだけを与える。それらは数が少ない。…しかし、多数のファセットが要求されるドキュメンテーションの分類では、すべてのファセットの順番を厳密に固定するのは危険であることが明らかであると思われる。この硬直化を打破しようと試みたことによって、すべての可能な特定主題のすべての可能なファセットは、五つの基本カテゴリー Time, Space, Energy, Matter, Personality のどれか一つの体現とみなすことができる、ということに気づいた。これら五つの基本カテゴリーの体現であるファセットに対してそれぞれ異なる連結記号を使えば、大きな自由度を獲得するであろうということを暫定的に推測してきた⁴⁰⁾。[p. 101]

ここで言われていることを補足すると以下のようになる、図書館の蔵書のためだけの分類法ではなく、雑誌論文なども含むドキュメンテーションのための分類法とするためにはより多くのファセットが必要である。しかし、多数のファセットをファセット式で固定すると硬直化が生じる。そこで、ファセット式で固定するのは、個々のファセットではなく基本カテゴリーとする。基本カテゴリーは固定されるが、ファセットは基本カテゴリーから必要に応じて体現させればよいので、自由度が得られる。

そして、上記の方法は選択ファセットについて検討する過程から生まれたと述べている⁴⁰⁾ [p. 101]。ここで初めて、選択ファセットと基本カテゴリーの関係が明らかとなった。また、新しい主題に対応する項目の挿入を可能とするための方法だから、基本カテゴリーは自己永続性のためのものである。

2. Communication (1951年)

1951年にもう1冊の図書 *Classification and Communication* (以下、Communication)⁸⁾ を出版している。

基本的には、これまでとほぼ同じことが述べられている。“Colon Classification の最初の3版においては、論じている世界の中のファセットの数は一定であることを暗黙裏の前提としている”⁸⁾ [p. 41], “Colon Classification の既存の版はこのような [新しい主題に対応する項目を挿入するための] 装置をもっていない”⁸⁾ [p. 42], “…進行中の研究の最も重要な貢献は、選択ファセット化記号法の利用である。それは、複合的で無限の世界においては、すべての可能な特定主題のファセットは一部だけが知られているし、またいつでも追加される可能性がある、ということ表現している。…使われている手法は、Time, Space, Energy (=Action, Process, Problems, etc.), Matter, Personality…と名付けられた五つのファセットの類を認識することである。これらは五つの基本カテゴリーと呼ばれる。以下の表のように、これらの類のそれぞれに異なる連結記号が使われる”⁸⁾ [p. 42-43] などである。

この著作で重要なのは、深い分類という用語がでてくることである。これも選択ファセットとともに CC 第3版で名前だけあげられていた用語である (II章B節3項参照)。ここでは「深い」の意味、および選択ファセットや基本カテゴリーとの関係が説明されている。

それゆえ、細目全体のいっそうの先鋭化、すなわち深い分類の成功は、まさにファセットの数の増加に依存している。これには困難が山積している。選択ファセット化記号法を設定すること、…Time, Space, Energy, Matter, Personality という基本カテゴリーの異なる体现である 120 ないし 2400 の原初的な表を構築することは、望ましい結果をもたらす方法の一つであると思われる⁸⁾。[p. 112-113]

それは、特性主題の意図していることを可能な限り深いレベルまで探求し、またそのために、最大の透過力と深度をもつ分析を採用していることから、深い分類と呼ばれる⁸⁾。[p. 113]

ここで述べられているように、「深さ」とは主題分析の深さであり、その結果としての細目の詳細さである。こうした深い分類を可能にするために、選択ファセットや基本カテゴリーという方法が必要となる。前項で見た Bibliographic Organization での議論と合わせると、1950 年前後という時期は雑誌論文なども含むドキュメンテーションが強く求められるようになり、図書館の蔵書だけでなく雑誌論文なども分類できるように深い分類が必要となった。そのための方法として選択ファセットやそれを実現するための基本カテゴリーという考え方が出てきた、ということになるであろう。

もともと基本カテゴリーは、初心者のための手引きという役割をもっていたが、この時点で深い分類のためという新たな役割を与えられたと考えることができる。A 節3項で見たように、「ファセットが先にあって、それらが基本カテゴリーでまとめられる」から「基本カテゴリーが先にあって、そこからファセットが体现する」というように、ファセットと基本カテゴリーの関係が今までと逆になったのは、この状況を反映していると思われる。すなわち、初心者にとっては最初から個々のファセットを考えるよりも、それらをまとめた基本カテゴリーを考えてからそれに属する個別のファセットを考える方がわかりやすいであろう。この場合の基本カテゴリーは手引きとしての役割を果たしている。一方、深い分類をするためには多数のファセットが必要であり、それらをファセット式で固定すると新しい主題に対応するファセットを適切に挿入できない。そこで、ファセット式で固定するのは基本カテゴリーとし、そこから多様なファセットを体现させることにすれば、硬直化が防げる。この深い分類のためというのが、基本カテゴリーのもう一つの役割である。

なお、A 節3項で見た Coding と同様に、分類法を列挙型、ハイブリッド型、分析合成型という三種類に分けて次のように述べている。“これまでの章で見たように、…分類が採るべき方向は詳細さを増加させることである。列挙型分類がこの方向に適していないことはわかっている。列挙型

に分析合成型を加えたハイブリッド型分類でさえも、すぐにその適合性を失ってしまう。詳細な分類という重圧に耐えられるのは純粋な分析合成型分類だけである”⁸⁾[p. 112]。

3. Colon Classification 第4版 (1952年)

以上見てきた基本カテゴリーをCCで最初に使ったのは第4版である(以下、CC第4版)⁴²⁾。ただし、基本カテゴリーについての説明はない。実例として使っているだけである。実例の一つを以下に示す。

メインクラス歴史では、三つのファセット [P], [E], [T] があり、ファセット式は、

V [P]:[E].[T]

である。色彩に富んだ (colourful) 語を使うと、

V [Community]:[Problem].[Period]
となる⁴²⁾。[pt. I: p. 45]

ここで、[P], [E], [T] は基本カテゴリーであるが、ファセットと呼ばれている(式の名称も基本カテゴリー式ではなくファセット式である)。基本カテゴリーの体現としてのファセットは、「色彩に富んだ語」と呼ばれている [Community], [Problem], [Period] の方である。

CC第4版では、レベル (Level) とラウンド (Round) も導入されている。レベルは階層関係を表現する手段である。たとえば、メインクラス植物学では、I [P], [P2]:[E] というファセット式が与えられている。[P] は、1 隠花植物、2 葉状植物、7 単子葉植物、8 双子葉植物、など植物の種類を表すファセットで、[P2] は、1 基本部位、11 細胞、12 組織、13 根、など植物の部位を表すファセットである。つまり、[P] と [P2] は植物の種類とその植物の部位という階層関係になっている。ラウンドは、同じ階層で同じ種類のファセットが出てきたときに区別するための手段である。たとえば、メインクラス教育では、T [P]:[E], [2P] というファセット式が与えられている。[P] は、1 前中等教育、13 就学前児童、

15 初等教育、2 中等教育、など教育段階を表すファセットである。[2P] は、A 科学、B 数学、C 物理学、など教育内容を表すファセットである。

ラウンドはファセット式に表示されていない場合でも挿入できる場合がある。たとえば、メインクラス図書館学では、2 [P]:[M]:[E] というファセット式が与えられている。ここにはラウンドは存在しない。しかし、図書館学の解説部分に、“Energy ファセットの細目が決まった後に、主題を表す第2ラウンドの Personality ファセットが必要になる場合は、コンマに続けて記載する”⁴²⁾[pt. I: p. 72] という説明がある。例として、「2:51N3,2 図書館学のコロソ分類法」があげられている。最初の「2」はメインクラス図書館学を表す。「51」は Energy ファセットの細目「分類」で、「N3」は Time ファセットの細目で「1930年代」を表す。つまり、「2:51N3」までで「1930年代に作成された分類法=コロソ分類法」を意味する。この後ろに、第2ラウンドの Personality ファセットの細目である「2 図書館学」がコンマに続けて挿入されて、上記の主題を表す記号になる。なお、この例では、ファセット式に存在しない Time ファセットも挿入されている。このように、ファセット式が与えられていても、それ以外のファセットを挿入する自由度が残されている。

なお、列挙型、分析合成型という用語は出てこない。これらの用語がCCに登場するのは第5版からである。

IV. 第3期: 1957年-1969年

前章の冒頭で見たように、1950年頃から、UDCを推進するFID、新しい分類法の開発に取り組むCRG、CCを図書館の蔵書以外の様々な文献にも適用できるように改良を続けるRanganathan、補助表の充実によって蔵書数の増加への対応と図書館の蔵書以外の資料への対応を改訂ごとに進めていくDDCという、分類に関する四つの主要な流れが存在した。そして、これらに共通するのは、詳細かつ複合的な主題にいかに対応するか、という問題であった。Ranganathan

はこれを深い分類と呼んだ。CC 第3版までのファセットおよびファセット式では硬直化が生じていて、深い分類に対応できなかった。基本カテゴリーの活用によってこの問題にある程度の解決を見たのだが、分類作業の一貫性が保てないという新たな問題に直面することになる。

A. 1957年-1960年

1. Colon Classification 第5版 (1957年)

III章B節3項で述べたように、CCに分析合成型という用語が登場するのは第5版(以下、CC第5版)⁴³⁾からである。その第0章:概要で以下のように述べている。

Colon Classification はいくつかの基本的な点で Decimal Classification や Congress Classification と異なっている。[DDCやLCCのような]分類表は列挙型分類法と呼ばれている。…Colon Classification においては、既製の分類番号がトピックスに割り当てられるのではない。…したがって、それは分析合成型の分類表である⁴³⁾。[pt. I: p. 12-13]

ただし、前後の説明は第1版以来ほとんど同じで、DDCやLCCに列挙型、CCに分析合成型という名称を与えているだけである。合成型という用語を Prolegomena 第1版(1937)で導入した後、分析合成型という用語を Coding (1950)で導入し、Communication (1951)およびこのCC5版でも使っているが、いずれも分類法の種類を分ける名称として使っているだけで、具体的な説明はほとんどない。

2. Dorking Conference (1957年)

1957年に分類法に関する非常に重要な国際会議が開催された。いわゆる Dorking Conference である。会議録の付録にはCRGによるファセット化分類法の必要性に関する論文⁴⁴⁾が再録されている。この国際会議でRanganathanも発表を行っている(以下、Dorking Conference)⁴⁵⁾。

この著作で重要なのは、分析合成型分類法とい

う名称に明確な意味づけを与えたことである。

分析合成型分類法は、文献に体现されている主要な考えを、ある基礎的な基本カテゴリーに対応するファセットへ、概念段階 (Idea plane) で分析する (analysis) ことから始まるのでこう呼ばれている。Colon Classification は五つの基本カテゴリー time, space, energy, matter, personality に基づいている。どのようなカテゴリーが採用されようと、その分類表は、各ファセットの細目の名前を…細目の番号に変換し、最後に、記号段階 (Notational plane) で細目の番号を分類番号に合成する (synthesizes)⁴⁵⁾。[p. 4] (下線は引用者)

このように、分析合成型分類法とは、ファセット分析から記号の合成までの過程を可能にする分類法であるとしている。

この著作では、これまで Prolegomena 第1版以来使われてきた規準と原理に加えて、公準 (Postulates) という用語が初めて登場する。“…私たちは分析合成型の分類表はいくつかの公準を必然的に含んでいることを発見した。たとえば、Colon Classification は21の公準を含んでいることがこれまでに見出されている”⁴⁵⁾[p. 3]。ただし、ここでは詳しい説明はなく、21の公準自体も次項で取り上げる Prolegomena 第2版に記載されることを示唆しているだけである。

ところで、先に見たように、Ranganathan のこの著作が掲載された Dorking Conference の会議録には、CRGによるファセット化分類法に関する論文が収録されている。このCRGの論文の出版年は1955年であるが、Ranganathan は1957年のこの会議でもファセット化分類法という表現は使っていない。ファセット化分類法という用語は、1951年にPalmerとWellsが使ったのが最初ではないかと思われる。彼らは、“列挙型分類法は多くの基本概念で構成される複合的な主題をリストしている。ファセット化分類法は基本的な用語をリストし、複合的な用語を構築することは分類作業者に残している”²⁴⁾[p. 37]と書いてい

る。Palmer と Wells が後に CRG 結成メンバーとなったことは前章の冒頭で述べたが、1955 年の CRG の論文は彼らの用語を採用したと考えられる。

3. Prolegomena 第 2 版 (1957 年)

1937 年に第 1 版が出版されてからちょうど 20 年後に Prolegomena の第 2 版 (以下, Prolegomena 第 2 版)³⁴⁾ が出版された。この著作でも、前項の Dorking Conference と同様、ファセット分析から記号の合成までの過程を必要とする分類法を分析合成型分類法と呼んでいる。

(1) 主題を…ファセットに分析し、各ファセット内の細目に名前をつける。…(2)…(3)…(4)…(5) 基本クラスの番号とそれぞれの [ファセット内の] 細目の番号を、連結記号を使って分類番号に合成する。これら五段階における意識的な作業を必要とする分類法が分析合成型分類法である³⁴⁾。[p. 228-229] (下線は引用者)

一方で、列挙型という面に注目して、既存の分類法を区分している。

知識領域の列挙型分類法においては、すべての既知の主題をほぼ網羅的にカバーするために、クラスが単一の表に列挙され、それに数個の補助表がつく場合とつかない場合がある。LC は厳密に列挙型 (Severely enumerative) である。SC もそう [厳密に列挙型] であるが、そのカテゴリー区分表は長い補助表を形成している。DC はほぼ列挙型 (Largely enumerative) であるが、その共通細目は補助表を形成している。UDC は主として列挙型 (Mainly enumerative) であり、五つの補助表をもっている。…しかし、本表の長さはすべての補助表を合わせた長さよりもかなり長い。BC は仮想的な列挙型 (Virtually enumerative) である。しかし、それは UDC と同程度に純粹の列挙型か

ら導き出されたものである。その一般的に使われる補助表は四つである。…さらに、特定のメインクラスで使われる四十一の補助表がある。…本表の長さはすべての補助表を合わせた長さよりもかなり長い。さらに、本表は、前者の補助表の助けを借りて作成されたクラスを散在させている。これは列挙的な質を増加させる。CC は列挙型からはほど遠い。それは一般的に利用するための四つの補助表 [材料, 場所, 言語, 時間] をもっている。…本表は 1 ページである。各メインクラスに一組の細目表が与えられている。分類番号は、各細目表と補助表から取られた番号を集めて合成される³⁴⁾。[p. 138]

この説明によると、本表に比べて補助表が充実しているほど、特に、本表が列挙型を基にしているのではないほど、列挙型としての性質が減少する、と考えているように思われる。Ranganathan にとって列挙型分類法の対極にあるのは分析合成型分類法である。ということは、ファセット分析から記号の合成までの過程を必要とする (可能にする) のが分析合成型分類法であるという先ほどの説明と、列挙型の性質が消失した (本表に比べて補助表が完全に充実した) という意味での分析合成型分類法という説明とがあることになる。しかし、補助表の充実だけが、あるいは、ファセット分析から記号の合成までの過程に基づくことだけが、分析合成型分類法を可能にする唯一の条件ではないはずである。

分析合成型分類法に必要なのは、ファセットの独立性、すなわち、ファセットに対応する分類記号を合成する際の自由度の高さである。これは、CC 第 1 版で見た、他の分類法に対する CC の利点「①区分特性ごとに区分が独立に行われるため、複合主題に対応した詳細な区分ができる」である。これが CC と他の分類法を分ける条件であった。CC が分析合成型分類法で、他の分類法がどの段階かはともかく列挙型分類法であるというなら、この①こそが分析合成型分類法を可能にする条件であろう。

実際、Ranganathan は別の方向からそのことを再確認している。それは、前章で見た深い分類の研究の中で明らかになってきたことである。Ranganathan は深い分類の研究の進展について説明する中で、以下のように述べている。

分析合成型分類法に伴う自由は CC において最大となる。これは、基本クラスと [ファセット内の] 細目のレベルだけに列挙を減少させたことによる³⁴⁾。[p. 279]

このように、分析合成型分類法の必要条件は自由度の高さであることを深い分類の探求という方向から再発見しているのである。しかし、それにもかかわらず、上記の分析合成型分類法に関する説明には反映されていない。この不整合が、Ranganathan の次の文にも現れているように思われる。

知識の全領域における新しい [領域の] 形成を、CC にあげられているファセット内の細目だけですべて表現できるわけではない。追加のファセットがあるかもしれない。それらは各々、適切な基本カテゴリー、ラウンド、レベルに割り当てられなければならない [ない] …。そのため、異なる分類作業者は異なる分類番号に到達するであろう。…これは分類作業者の自律性を減じることを意味している。これは CC の限界である³⁴⁾。[p. 279-280]

この限界は CC だけに固有のものであろうか。それとも、いかなる分析合成型の分類表にとっても限界となるのであろうか。これらの質問に答えるには、分析合成型の分類表についての私たちの経験があまりに乏しい。推測だけが可能である。…³⁴⁾[p. 280]

もともと、分析合成型分類法 (CC) の条件はファセットの独立・自由度の高さである。しかし、自由度が高いと分類作業の一貫性が保証されない。そこでファセット式の充実・固定によって

一貫性を保証しようとしたのだが、深い分類の必要性の認識から再び自由度が求められるようになり、基本カテゴリーや選択ファセットが導入された。ところが、それが再度、分類作業の一貫性を損なう結果となっている。つまり、分析合成型分類法は完成の域に達していない。少なくとも Ranganathan はそう考えていたと思われる。

4. Elements 第2版 (1959年)

1945年に第1版を出版した *Elements of Library Classification* の第2版 (以下、Elements 第2版)⁴⁶⁾が1959年に出版された。第1版に比べて、ファセット分析の章が拡張され、第1版にはなかった基本カテゴリーの章が立てられている。その中で、公準もあげられている。また、規準と原理のリストが付録として収録されている。

分析合成型分類法と列挙型分類法については次のように述べている。

ファセット分析を容認し、ファセットの配列に関する規則を用意し、多様な主題に必要な種々のファセットを用意し、連結記号を用意し、ある主題の基本クラスと細目の番号を分類番号へ合成することを認めている分類表は、分析合成型の分類表と呼ばれる…。Colon Classification と Universal Decimal Classification は分析合成型の分類表である。前者は後者より徹底している。…それに対して、列挙型の分類表はファセット分析に基づいていない⁴⁶⁾。[p. 84]

基本的にはこれまでの説明と同じである。ただし、UDCの位置づけが異なる。前項で見た Prolegomena 第2版では補助表の充実度という観点からUDCは「主として列挙型」として扱われていたが、ここではファセット分析および記号の合成の観点から分析合成型と呼ばれている。

5. Colon Classification 第6版 (1960)

CCの第6版 (以下、CC第6版)⁴⁷⁾はRanganathanが生前に編集した最後の版である。基本的

には第5版と大きな違いはない。今後の展開にとって重要な点は、公準をCCの中で初めて使用したことである [pt. I: p. 40]。ただし、リストに名称があげられているだけで、説明については Prolegomena 第2版の節番号を示してそちらを参照するように指示している。原理はCC第3版から使用されていたが、第6版で初めてリスト化された。規準は第1版から使用されており、リスト化も第5版から行われている。このように、規準、原理、公準の順にCCに導入され、扱いも「規準と原理」が優先されていた（前項で見たように、Elements 第2版では規準と原理のリストが付録としてつけられているが、公準のリストはなかった）。

B. 1961年-1964年

1. On the March (1961年)

Ranganathan の分類の師でもあり、分類論を体系化したイギリスの研究者 Sayers の追悼論集に、CRG のメンバーを中心として15人の論文が収録されている。もともと Sayers の80歳の誕生記念を意図して企画された論集で、Ranganathan の著作 Library classification on the March (以下、On the March)⁴⁸⁾も収録されている。

この著作では、Sayers の思い出とともに、Ranganathan の分類理論の発展の過程を整理している。まず、ファセット分析の説明をした後で、ファセット式について言及する。“各基本クラスにはファセット式が与えられている。この式は分類作業が概念段階で分析をおこなう際に役立つ手引きを提供する。これはまた、記号段階で合成する前に、ファセットの順序を一貫性をもって決めるのに役立つ”⁴⁸⁾ [p. 83]。次に分析合成型分類法の説明を行っている。“分析合成型分類法は、現在の書架上の図書を分類して配列する前に、ファセット式を与えることができる。しかし、パーティカルファイル中のマイクロな文献 [雑誌論文など] や書誌の中でのそれらの記入を分類し配列するための、十以上の適正なファセット式を前もって与えることはできない。誕生しようとしているマイクロな考え方が直面しているこの問題

は、分析合成の手法をよりいっそう深いところへ急潜行させてこれから発展しようとする段階まで導き、マイクロな考え方の膨大な文脈の中で多様なファセットとして体现する生産的なあるいは基本的なカテゴリーを探させる”⁴⁸⁾ [p. 88]。ところが、“PMESTによって事態が複雑化した。それらは五つだけである。しかし、1ダース以上のファセットに責任を負わなければならない。この困難にはPMESTのラウンドとレベルの概念を要請することで対応した。ある主題中のファセットのいくつかのラウンドやレベルを扱うことができ、それによって、マイクロな文献やそれらの記入を有用に配列することができる図書館分類は深い分類と呼ばれるようになった”⁴⁸⁾ [p. 88-89]。

ここまでの説明は、A節3項で Prolegomena 第2版について検討した結果から筆者が整理した流れそのもの、すなわち「従来の分類法よりも詳細な分類を可能にするためのファセットの独立化・自由化→分類作業の一貫性を保証するためのファセット式の固定→深い分類を実現するための基本カテゴリーや選択ファセットの導入による再度の自由化→再度、分類作業の一貫性を損なう結果」である。Prolegomena 第2版を出版した1957年当時は、Ranganathan 自身はまだこの整理がきちんとできていなかったことも見た。しかし、上の引用で見たように、この著作ではその整理ができたように思われる。そして、この整理の作業を通じて、CCあるいはより一般的に分析合成型分類法のかかえる問題（深い分類における分類作業の一貫性の欠如）の解決策を提示するに到った。それは、公準と原理に基づくことである。

公準と原理を組み合わせることによって、その主題の分類番号に到達することができ、すべての主題がこれらの分類番号で配列されるとき、それらは有用な順序になる⁴⁸⁾。 [p. 93]

そして、

図書館分類への公準によるアプローチは、ク

ラスをいたるところで列挙することによる硬直化と、各基本クラスのファセット式をあらかじめ決めておくことによる硬直化から、図書館分類を自由にする⁴⁸⁾。[p. 72]

とも述べている。これは、ファセット式を固定化することによる硬直化を防ぐために基本カテゴリーや選択ファセットを導入した深い分類の問題を、公準と原理によって解決できるということである。

公準についてはこれまでの著作でも説明されていたが、深い分類の問題を解決するための手段という位置づけがここで与えられたことになる。なお、これまでは規準と原理が組合せられていたが、ここでは公準と原理が組合わされている。

2. Elements 第3版 (1962年)

Elements of Library Classification の第3版 (以下、Elements 第3版)⁴⁹⁾で、これが最後の版である。第1版でファセット分析の章が一つだけだったのに対して、第2版では二つに増え、この第3版ではファセット分析という見出しの章が三つになり、さらに基本カテゴリー、分類法の種類という二つの章が加わった。ただし、小分けをしているだけで、内容的にはほとんど第2版と同じである。実質的に増えたのは、分類法の実例の章だけである。

3. Seventy Papers (1963年)

シンポジウムの講演集で、70論文のうち29論文をRanganathanが書いている。その中で、分類を扱った論文 (以下、Seventy Papers)⁵⁰⁾を取り上げる。この著作では、CCにおけるファセット分析の発展段階を5段階に分けている。“最初の段階は1925年から1933年である。1925年はCCの最初の設計の年である。1933年はCCの第1版が出版された年である。最初の段階では、ファセット式は認められたファセットだけを列挙していた。また、ファセットの順序を固定していた。この厳密な規定によって、どの基本クラスに属する分類番号の中でも、ファセットの順序の一

貫性が自動的に保証された”⁵⁰⁾ [p. 606]。第2段階は1933年からCCの第2版が出版された1939年までであるが、特に重要なのはファセット式 (この当時は区分特性の式) が導入されたことである [p. 606-607]。続いて、“第3段階は1939年から1950年である。CCの第3版が1950年に出版された。…この第3段階では、ドキュメンテーションが広範囲に流行し始めた。…このことが、あらゆる主題の (基本ファセット以外の) すべてのファセットを、五つの基本カテゴリーP, M, E, S, Tのいずれかの体現とみなす可能性へと導いた”⁵⁰⁾ [p. 607]。そして、“第4段階は1950年から1957年である。CCの第5版が1957年に出版された。この段階の間に、P, M, E, S, Tの考えが追求された。…これはファセット式の硬直化の多くを取り除いた。その上、特定の基本クラスの主題の間だけでなく、…すべての主題の間で、ファセットの順序の一貫性が保証されていた。…さらに、新しいミクロな主題を…既に配列されている主題の間の適切な箇所位置づけるメカニズムを提供した”⁵⁰⁾ [p. 607-608]。最後に、“第5段階はまだ進行中である。それは1956年の末から始まった。その主要な特徴は、分類を一組の公準に基づかせることである。…ファセットを一定のラウンドとレベルに割り当てることを規定するための原理もある”⁵⁰⁾ [p. 608]。

このように、本節1項のOn the Marchで見たRanganathanの分類理論の発展過程を、ここではCCの発展過程として整理している。基本的な内容は同じであるが、CCは必ずしもRanganathanの分類理論をすぐに反映しているわけではないので、CCの改訂版を段階の区切りとするのは無理があるように思われる。ただし、公準と原理に基づく分類法がまだ進行中であると明言している点には着目する必要がある。

4. Subject Heading (1964年)

1964年の著作⁵¹⁾でも、公準と原理に基づくファセット分析という表現が出てくる [p. 109, 112]。1961年から1964年にかけてこの考えが確定されていったものと思われる。

C. 1964年-1969年

1. Elsinore Conference (1964年)

Dorkin Conference (A 節 2 項参照) に続く重要な国際会議が、1964年9月にFIDの分科会FID/CR主催の国際会議として開催された。通称Elsinore Conferenceと呼ばれている。この会議の会議録(以下、Elsinore Conference)にRanganathanの著作2件が収録されている。

1件はLibrary classification through a century⁵²⁾で、100年間に作成された様々な分類法を時代によって区分している。その時代区分は以下の通りである。

1 前ファセット時代: 1876年から1896年 (DDC, EC)

単一の列挙型の表と若干の補助表からなる。[p. 19-20]

2 ファセット時代への移行期: 1897年から1932年 (UDC)

基本は単一の列挙型の表であるが、いくつかのファセットを備え、雑誌論文などのミクロな文献にも対応する試みがなされている。[p. 20-21]

3 ファセット時代: 1933年から1975年 (CC)

3.1 限定された (restricted) ファセット式時代: 1933年から1949年

すべてのファセットに対して同じ連結記号コロンを指定する。最後尾のファセットにだけでなく、どのファセットにも新しい記号を加えることができる。[p. 22]

3.2 限定されないファセット式時代: 1950年から1956年

ある主題のファセットを、五つの基本カテゴリーPMESTのいずれかの体現とみなす。異なる基本カテゴリーに異なる連結記号を指定する。[p. 22]

3.3 相対的 (relativity) 時代: 1957年から1975年

3.3.1 Dorking 時代または公準と原理の時代: 1957年から1964年

公準に基づく分類の広範囲な実施。ファセットの順序に対して五つの原理を前提する。[p. 26-27]

3.3.2 Elsinore 時代または協同設計 (Co-operative Design) 時代: 1965年から1975年

この時代はまったく将来のことである。[p. 32]

エルシノア時代が協同設計時代という別名を与えられるように、次の十年間に国際的なチームワークのプログラムが実行されることが期待されている。[p. 35]

まず、前ファセット時代とファセット時代への移行期がCC以前の分類法とされている。CCとそれ以前の分類法は分析合成型分類法と列挙型分類法という区分をされるが、この著作では分析合成型という用語が出てこない。A 節 3 項で見たProlegomena 第2版の列挙型の度合いで分類法を区分する方法に近いと思われる。

一方、CC自体の発展段階の区分である3.1, 3.2, 3.3は、B 節 3 項で見たSeventy PapersのCCの改訂版で区分する方法とほぼ同じである。「3.1 限定されたファセット式時代: 1933年から1949年」がCC第1版(1933年)と第2版(1939年)、「3.2 限定されないファセット式時代: 1950年から1956年」がCC第3版(1950年)と第4版(1952年)、「3.3.1 Dorking 時代または公準と原理の時代: 1957年から1964年」がCC第5版(1957年)と第6版(1960年)である。「3.3.2 Elsinore 時代または協同設計時代: 1965年から1975年」はCCの新しい版(第7版)を想定していると考えられる。

なお、この著作でファセット化分類法という用語が出てくるが、先述のように分析合成型分類法という用語は出てこず、ファセット化分類法についての説明もない。

Elsinore ConferenceでのRanganathanのもう一つの著作⁵³⁾では、ファセット化分類法と分析合成型分類法との関係について述べている。

分類法の設計は、公準の他に、…ある主題におけるファセット間の順序を決めるための指定された原理によって導かれる。…一組の確立された公準と原理に従う分類表は、導かれた分類表 (Guided scheme) と呼ばれる⁵³⁾。
[p. 85]

[分類表間の] 本質的な相違は、分類法を設計する際の導きとなる公準と原理によってのみ生じる。列挙型の分類表と分析合成型の分類表は本質的に異なっている。ファセット化分類法は、もしそれが [公準と原理に] 導かれたものでないなら、分析合成型ではない⁵³⁾。
[p. 81]

しかし、もしそれが導かれた分類表なら、ファセットに関する無限の受容力 (Hospitality) [新しいファセットを挿入できるなど] を提供することができる。そのとき初めて、ファセット化された分類表は真の分析合成型の分類表となる。しかし、現在、ファセット化と分析合成型という二つの用語は、あたかもそれらが同義であるかのように大雑把に (loosely) 使われている⁵³⁾。
[p. 86]

二つ目の引用で述べられているように、「列挙型の分類表と分析合成型の分類表は本質的に異なっている」のであるから、分類法はすべて列挙型か分析合成型かに区分される。ファセット化分類法は、列挙型にもなりうるし分析合成型にもなりうる。公準と原理によって導かれたファセット化分類法が分析合成型分類法となり、そうでなければ列挙型分類法である。このように、Ranganathan はファセット化分類法と分析合成型分類法は同義ではないと明言している。

ただし、Elsinore Conference の会議録が出版されたのと同じ1964年に、インド規格協会による分類の用語集⁵⁴⁾が出版されている。この用語集はRanganathan が委員長として編集したものである。この中に「分析合成型分類法」という項目があるが、その説明の最後に「別名 (Alter-

nate term) ファセット化分類法」と書かれている⁵⁴⁾ [p. 72]。Ranganathan はこの記述に気づかなかったのだろうか。

2. Rutgers Seminar (1965年)

1964年11月にラトガース大学で行われたRanganathanのセミナーの講演録⁹⁾で、自身の研究を振り返っている。その中で、ファセット化分類法と分析合成型分類法との関係について次のように述べている。“実際、ファセット化された分類表をすべて分析合成型の分類表と呼ぶのは適切でない、ということがいまやよりいっそう明らかとなった。ファセット化された分類表は、その表の設計や拡張が一組の公準と原理に導かれる場合、そしてその場合にのみ、分析合成型の分類表となる”⁹⁾ [p. 20-21]。これは前項のElsinore Conferenceでの説明と同じである。しかし、さらに踏み込んで次のように述べている。“分析合成型分類法はすべてファセット化分類法であるが、ファセット化分類法のすべてが分析合成型分類法というわけではない”⁹⁾ [p. 275]。前半の「分析合成型分類法はすべてファセット化分類法である」という説明は、公準と原理に導かれたファセット化分類法が分析合成型分類法であるという説明から推測はされるが、Elsinore Conferenceでは「ファセット化されていない分析合成型分類法は存在しない」とは明言されていなかった。さらに、次の引用文では、前項のElsinore Conferenceでは出ていなかった「ファセット化されていない列挙型分類法」という表現も使われている。“Colon Classificationの第1版は単なるファセット化分類法であった。しかし、ファセット化されていない列挙型分類法よりは硬直化が少なかった”⁹⁾ [p. 10]。

以上を整理すると、分類法は、

ファセット化されていない列挙型分類法

ファセット化された列挙型分類法

ファセット化された分析合成型分類法

に区分されることになる。そして、CC第1版は「単なるファセット化分類法」と呼ばれていることから、「ファセット化された列挙型分類法」に

入れられることになる。

実際、セミナー終了後の質疑応答で、CRGによって開発されたファセット化分類表はCCの改訂の基礎になりうるか、というAthertonからの質問を受けて以下のように答えている。

私を知る限り、英国の分類研究グループによって開発されたファセット化分類表は分析合成型ではありません。それらはColon Classificationの初期の版、そうですね、1955年までの版の段階にあるように思われます。この理由から、それらをColon Classificationの改訂の基礎にすることはできません⁹⁾。[p. 275]

CCの1955年までの版とは、第5版が1957年であるから、その前の1952年に出版された第4版までのことである。第4版までのCCはファセット化分類法ではあるが、まだ分析合成型分類法ではないということになる。

3. Prolegomena 第3版 (1967年)

*Prolegomena to Library Classification*の第3版(以下、Prolegomena 第3版)¹⁰⁾で、最後の版である。この中でRanganathanは、分類法を以下のように区分している(説明文は筆者の要約である。各項目の最後の角括弧内の数字は説明が記述されているページを示す)。

① 列挙型分類法 (Enumerative classification):

LCC, Rider

列挙型の分類表は、本質的に、過去、現在および予測される未来のすべての主題を列挙した単一の表から成る。そのような表は必然的に長くなる。しかも、予測した以上の主題の出現にすぐに圧倒されてしまう。圧倒されてしまうというのは、新しい主題をそれぞれ既存の主題の間の適切な場所 (filiatory position) に位置づけることが困難であるという意味である。さらに、列挙型の表の分類番号は、意味的に豊かな記号(連結記号のような意味をもたない記号ではないということ)の連続体となり、有意義なファセットに分け

られていないことが多い。この意味で、その分類番号は単一構造体 (monolithic) と言えるであろう。[p. 95]

② ほぼ列挙型分類法 (Almost-enumerative classification): DDC, SC

ほぼ列挙型の分類表は、過去、現在および予測される未来の大部分の主題を列挙した一つの大規模な表と、数個の共通細目の表から成る。主題の表は基本主題だけでなく複合主題も列挙する。そのため、主題の表は長くなる。(主題の表に列挙されていない複合主題の分類番号を、共通細目の表の助けを借りて少しは構築することができる。それにもかかわらず、予測をした以上の、あるいは共通細目と列挙されている主題を結合することで得られる以上の、主題の出現にすぐに圧倒されてしまう。さらに、ほぼ列挙型の表の大部分の分類番号は、意味的に豊かな記号の連続体となり、意味をほとんどもたない記号(連結記号のこと)によって有意義なファセットに分けられていないことが多い。この意味で、その分類番号は単一構造体と言えるであろう。[p. 97]

③ ほぼファセット化分類法 (Almost-faceted classification): UDC, BC

ほぼファセット化された分類表は、過去、現在および予測される未来の大部分の主題を列挙した一つの大規模な表に加えて、数個の共通細目の表といくつかの特殊な細目の表から成る。主題の表は基本主題だけでなく多数の複合主題も列挙する。そのため、主題の表は長くなる。複合主題の分類番号を、共通細目の表だけでなく各主題ごとに与えられる特殊細目の表の助けを借りてより多く構築することができる。共通細目もしくは特殊細目の助けを借りて形成される複合主題の分類番号は、表の中でクラスやその細目の番号のために使われる意味的に豊かな記号とは別の連結記号を備えている。したがって、そのような複合的な分類番号は多重構造体 (polyolithic) と言える。[p. 102]

④ 硬直化したファセット化分類法 (Rigidly-faceted classification): CC 第1版~第3版

ファセット化分類表は、基本クラス、共通細目

および特殊な細目の表だけから成る。ファセット化分類法においては、複合主題を列挙した表は存在しない。複合主題の分類番号はすべて、それぞれの主題を列挙した基本主題、共通細目、および特殊な細目の助けを借りて構築される。通常、すべての表が短い。それらの多くは二つないし三つの欄を超えることはない。ファセット化分類法は、新しい主題の出現に圧倒されることはない。それらはせいぜいのところ、細目の表の新設が既存の基本主題や細目の表の拡張を必要とするだけである。複合主題の分類番号は、表の中でクラスやその細目の番号のために使われる意味的に豊かな記号とは別の連結記号を備えている。したがって、ファセット化分類法のすべての複合的な分類番号が多重構造体と言える。[p. 106]

硬直化したファセット化分類表においては、基本クラスに伴うすべての主題に対するファセットとその順序が事前に決められている。これは硬直化ということである。硬直化したファセット式では、中間のファセットが空位だと連結記号が繋がってしまう。さらに、事前に決められた硬直化したファセット式は、新しい複合主題が提示する追加のファセットの挿入を妨げた。[p. 107-108]

⑤自由なファセット化分類法 (Freely faceted classification): CC 第4版以降

自由なファセット化分類表においては、基本主題に伴う複合主題に対する硬直化し事前に決められたファセット式は存在しない。自由なファセット化分類法においては、既存の表によって影響されたり妨げられたりすることなく、複合主題に生じるいかなるファセットもその主題のファセット分析によって見出される。そして、見出されたファセットの適切な順序は明示された公準と原理に従って決定される。このように、各複合主題がそれ自身のファセットを決定するのである。また、それ自身のファセット順序も決定する。ファセットの数や順序に何も制限はない。すべてが自由である。これが、この分類表が自由なファセット化分類法と呼ばれる理由である。さらに、分析と合成の観点から分類法の進展を順に見ていくと、この種類の分類法の別名 (another name)

は分析合成型分類法である。複合主題のファセットの順序は、どのような複合主題にも適用できる基礎的な公準と原理に従って決定されるので、分析合成型分類法のこの特徴を強調するために、公準と原理に導かれた分析合成型分類法と呼ばれる。いかなるファセット化分類法も、それが自由なファセット化でなければ、分析合成型ではないことを強調しておく。[p. 109]

以上が Prolegomena 第3版における分類法の区分である。前項で見た区分に対応させると、

①②: ファセット化されていない列挙型分類法

③④: ファセット化された列挙型分類法

⑤: ファセット化された分析合成型分類法

となるであろう。ただし、④と⑤は少し微妙である。前項では CC 第4版までがファセット化された列挙型分類法という位置づけで、第5版以降がファセット化された分析合成型分類法とみなしていたはずである (Atherton の質問への回答)。しかし、この Prolegomena 第3版では、⑤の自由なファセット化分類法に CC 第4版を入れている。⑤の最後の部分で、自由なファセット化分類法が分析合成型であると述べているのだから、CC 第4版はファセット化された分析合成型分類法ということになる。

4. Colon 第7版 Preview (1969年)

Ranganathan は生前に CC 第7版の試案 (以下、Preview)⁵⁵⁾を公表していた。この中では、分類法を以下のように六つの種類に区分している [p. 12-13]。

①純列挙型の分類表 (Purely enumerative scheme): Rider

②ほぼ列挙型の分類表 (Almost enumerative scheme): DDC

③ほぼファセット化された分類表 (Almost faceted scheme): UDC

④完全だが硬直化したファセット化分類表 (Fully but rigidly faceted scheme): CC 第1版~第3版

⑤ほぼ自由なファセット化分類表 (Almost

freely faceted scheme): CC 第4版～第6版

“多様な種類のファセットに対する別個の指示記号〔連結記号〕およびラウンドとレベルの概念の使用が、複合主題中に生じるファセットの数と順序における深刻な硬直化を取り除いたので、「ほぼ自由なファセット化」と呼ばれる。しかし、ラウンド内のファセットのレベルに関してはいくらかの硬直化が潜んでいた。このために、完全に自由なファセット化ではなかった”⁵⁵⁾ [p. 13]。

- ⑥自由なファセット化分類表 (Freely faceted scheme): CC 第7版 (準備中)
 “セクター記号法 (Sector notation)⁵⁶⁾の助けを借りて、〔⑤に〕潜んでいたラウンド内のファセットのレベルの数とそれらの順序における硬直化がほぼ取り除かれた。〔その他の改善点をあげている〕したがって、〔⑥における〕Colon Classificationはいまや自由なファセット化分類表となった”⁵⁵⁾ [p. 13]。

前項で見た Prolegomena 第3版では「⑤自由なファセット化」に入れられていたCC第4版以降が、ここでは新しく設けられた区分「⑤ほぼ自由なファセット化」に第4版から第6版までとして入れられている。そして、「⑥自由なファセット化」にはこれから出版予定のCC第7版が入っている。

このように、本節2項の Rutgers Seminar, 3項の Prolegomena 第3版、そしてこの Preview と、それぞれでCC各版の位置づけが変わってきている。しかし、それ以上に大きな変更がこの Preview で見られる。それは以下の文である。

「分析合成型の分類表」という用語は、複合主題が最初に概念段階でファセットに分析され、後に言語段階 (Verbal plane) と記号段階のそれぞれで合成される分類表全体を指す一般的な用語である。例: Colon Classification は

どの版も完全な (fully) 分析合成型である。Universal Decimal Classification は分析合成型の性質をわずかにもっている。分類表がファセット化という性質をもつということは、それが分析合成型になるということを意味していることがわかる⁵⁵⁾。 [p. 13-14]

ここでは、CCはどの版も分析合成型であると述べている。前項の Prolegomena までは自由なファセット化分類法だけが分析合成型であるとされていた (上の区分では⑤⑥) のに、ここでは硬直化したファセット化分類法 (④) も分析合成型とされているのである。しかも、ほぼファセット化された分類法 (③) である UDC も分析合成型の性質をわずかにもっているという。上の引用からも推測されるように、ファセット化と分析合成型はそれぞれ定義は異なるが、結果的にはほぼ同じものを指していると考えているように思われる。

最初は分析合成型という用語を使ってファセット化という用語は使わなかったが、後に公準と原理に導かれたファセット化分類法だけが分析合成型分類法である (Elsinore Conference, Rutgers Seminar: 本節1項, 2項) として両者の違いを強調し、さらに、公準と原理に導かれたファセット化を自由なファセット化と呼び、それだけが分析合成型であるという立場を続けた (Prolegomena 第3版: 本節3項) が、最後になってファセット化と分析合成型がほぼ同じものを指しているような説明をしているのである。この変化が何によるものかは推測でしかないが、CRGによるファセット化という用語の普及が影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

なお、Ranganathan の死後に Gopinath によって編集されたCC第7版⁵⁷⁾では、CC第7版を自由なファセット化分類法と呼んでいる。これは Preview の Ranganathan の区分と一致する。しかし、自由なファセット化分類法の別名 (another name) は分析合成型分類法であるとし、自由なファセット化でなければ分析合成型ではないと述べている⁵⁷⁾ [序文 p. 8]。これは Preview よりも前の Ranganathan の見解に戻ってしまう。

V. 結 論

Ranganathan のファセット概念に関わる著作を逐次的に検討した結果、3期に分けられることがわかった。この各期間が、I章の序論で述べた三つの研究目的、「ファセット概念、ファセットと基本カテゴリーの関係、ファセット化分類法と分析合成型分類法の関係」に対応している。

A. ファセット概念の意味

第1期は1933年から1945年までで、この時期はファセットおよびファセット式概念が確立されていく過程としてとらえることができる(II章参照)。

CC第1版(1933年)では区分特性と呼ばれているが、事実上のファセット概念はすでにCC第1版から存在していたといえる。Prolegomena第1版(1937年)では、「区分特性」を「区分特性の系列」と呼び変えている。ファセットという用語を初めて使用したのは、Fundamentals(1944年)においてである。ただし、ファセットとは何かという直接の定義は与えられていない。「区分特性の系列に基づく細目」と「ファセット」が対応させられているだけである。「区分特性の系列」が「ファセット」という用語で置き換えられたことを明記したのは、Elements第1版(1945年)においてである。CCの中でファセットが用いられるのは第3版(1950年)からで、ここでは「区分特性の系列に基づく区分肢の総体」と定義されている。

一方、ファセット式概念に対応するものは、CC第2版(1939年)の区分特性の合成方法の表示である。Fundamentals(1944年)ではファセットという用語を使い始めたにもかかわらず、ファセット式ではなく区分特性の式と呼んでいる。ファセット式と呼ばれるようになるのはElements第1版(1945年)からである。

RanganathanがCCを作成した理由は、DDCやECなどの従来の分類法では詳細な区分を行えないと考えたことにある。詳細な主題に対応するためには、単一要素から成る記号ではなく、複数

の独立の要素から成る記号を採用する必要に気づいたのである。そして、各要素がファセットを構成し、各ファセットは独立している分類法としてCCを考案した。このようにCCは、①複数の独立の要素から成る記号を採用している、②各要素がファセットを構成している、という二つの特徴をもっている。

ファセット概念自体は「区分特性の系列に基づく区分肢の総体」という単純かつ明確な概念であるが、これがCCという特定の分類法の中で使われたことにより、上記の①と②というCCの二つの特徴がファセット概念自体の理解に影響を与え、さらには、後のファセット化分類法と分析合成型分類法の関係の理解にも影響を及ぼしているものと考えられる。

B. ファセットと基本カテゴリーの関係

第2期は1949年から1952年までで、この時期は基本カテゴリーの考えが変遷していく過程としてとらえることができる(III章参照)。

五つの基本カテゴリーPMESTは、第1期で見たFundamentals(1944年)ですでに導入されている。しかし、そこではまだ、初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を想定していて、一般化したファセット式で使うことは考えていなかったと思われる。Ranganathanが基本カテゴリーの役割を変えるようになった背景には、1948年に開催されたRoyal Society Scientific Information Conferenceに象徴されるように、従来の単行書を中心とした図書館の蔵書だけでなく、科学技術文献を中心とした詳細かつ複合的な主題をもつ文献にも対応できる分類法の必要性の高まりがある。

Self-perpetuating(1949年)やPhilosophy(1951年:実際の執筆は1949年か1950年)、それに第1期に入れたCC第3版(1950年)には、選択ファセットという用語が出てくる。これは、ファセット式の中で連結記号コロンで合成されているファセットだけでなく、必要に応じて連結記号ドットを使ってそれ以外のファセット(選択ファセット)を挿入できるようにするというものである。

それによってより詳細かつ複合的な主題に対応しようと考えたのである。しかし、CC第3版にも述べられているが、まだ完成してはいなかった。

この選択ファセットの考えは、ファセット式の硬直化の問題とも関係している。Bibliographic Organization (1951年)では、分類法にとって硬直化が問題であることを指摘している。詳細かつ複合的な主題に対応するためには、より多くのファセットが必要である。しかし、多数のファセットをファセット式で固定すると硬直化が生じる。そこで、ファセット式で固定するのは、個々のファセットではなく基本カテゴリーとする。基本カテゴリーは固定されるが、ファセットは基本カテゴリーから必要に応じて体现させればよいので、自由度が得られる。こうして、初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を想定されていた基本カテゴリーが、詳細かつ複合的な主題に対応するために多数のファセットをそこから体现させるという役割に転換させられたのである。また、詳細かつ複合的な主題に対応することは、深い分類とも呼ばれる。Communication (1951年)ではこの深い分類という用語を使って、上記と同じ基本カテゴリーの役割の転換を論じている。

この役割の転換は、Bibliographic Organization (1951年)以前のCoding (1950年)でもある程度は行われていた。そこでは「ファセットは基本カテゴリーの体现である」という表現が使われている。それまでは、「ファセットが先にあって、それらが基本カテゴリーでまとめられる」という意味で使われていたが、「基本カテゴリーが先にあって、そこからファセットが体现する」という意味に変換されたのである。しかし、この著作ではまだこの変換の意味を明らかにするところまでは踏み込んでいなかった。

C. ファセット化分類法と分析合成型分類法の関係

第3期は1957年から1969年までである。基本カテゴリーの活用によって詳細かつ複合的な主題に対応することができるようになったが、ファセットの数や順序がファセット式で固定されない

ため、分類作業の一貫性が保てないという新たな問題に直面することになる。この問題を検討するとともに、UDCやDDCとの差異を明確にすること、CRGが主張するファセット化分類法と自身が使用してきた分析合成型分類法との関係を明らかにすること、がRanganathanの分類研究の最後の段階である。

基本カテゴリーの活用によって深い分類には対応できたが分類作業の一貫性が保てなくなったという問題に対して、公準と原理を用いるという解決策を見出した。第1期のProlegomena第1版(1937年)以来使われてきた規準と原理に加えて、公準という用語が初めて登場したのはDorking Conference (1957年)においてである。また、CCで公準を初めて用いたのは第6版(1960年)である。しかし、これらの著作ではまだ基本カテゴリーの問題との関連は論じられていない。基本カテゴリーを用いなおかつ分類作業の一貫性を保つためには、基本カテゴリーに対応する新しいファセットの挿入や、それらの順序などに関する規則が必要である。それが公準と原理である、ということを確認しているのはOn the March (1961年)においてである。

一方、UDCやDDCとの差異やCRGが主張するファセット化分類法との関係については、分析合成型分類法という概念を用いて検討を続けていた。すでに第1期のProlegomena第1版(1937年)で、合成ができる分類法を合成型分類法と呼んでいる。また、第2期のSelf-perpetuating (1949年)では、合成型分類法を列挙型分類法と対比させている。そして、やはり第2期のCoding (1950年)で、分析合成型分類法という用語を初めて使用している。第3期のCC第5版(1957年)にも分析合成型という用語が登場する。しかし、いずれも詳しい説明はなかった。Dorking Conference (1957年)で、分析合成型分類法という名称に初めて明確な意味づけを与えている。それは、ファセット分析から記号の合成までの過程を可能にする分類法、ということである。しかし、Prolegomena第2版(1957年)では、本表に比べて補助表が充実しているほど、特

に、本表が列挙型を基にしているのではないほど、分析合成型分類法になるという説明になっている。このように、分析合成型分類法という概念は曖昧なものであった。

分析合成型分類法という概念の曖昧性は、各種分類法の区分にも反映されている。Seventy Papers (1963年)、Prolegomena 第3版(1967年)、Preview (1969年)でそれぞれ分類法の区分を行っているが、少しずつ異なる区分となっている。特に、CCの各版の位置づけが著作によって変わるのである。これは、ファセット化分類法と分析合成型分類法との関係についても同様である。Elsinore Conference (1964年)では、公準と原理に導かれたファセット化だけが分析合成型であるとし、Prolegomena 第3版(1967年)では、公準と原理に導かれた自由なファセット化だけが分析合成型であるとして、ファセット化分類法と分析合成型分類法は同義ではないと主張していた。しかし、Preview(1969年)では、ファセット化と分析合成型はそれぞれ定義は異なるが、結果的にはほぼ同じものを指していると考えているように思われる。

このように、Ranganathan自身の著作に、分析合成型分類法という概念の曖昧さと各種分類法の位置づけの揺れが見られる。これが、I章で述べた、「ファセットも合成も、そうでない分類法と区分するための用語として適切なのかという疑問」の原因のように思われる。本章A節の第1期に関する考察の最後で見たように、CCを他の分類法から区分するのは、①複数の独立の要素から成る記号を採用している、②各要素がファセットを構成している、という二つの特徴である。どちらか一つの特徴だけでは不十分である。

UDCやBCは複数の独立した要素から成る記号を備えている。そういう意味では、CC、UDC、BCは同じグループに区分することができる。これは①の特徴による区分である。逆に言うと、①の特徴だけではCCとUDCやBCを区分することができない。しかし、UDCやBCの各要素は必ずしもファセットを構成していない。ファセットとは「区分特性によって区分されてで

きる区分肢の総体」であるが、UDCやBCにはこの意味でのファセットとは呼べない要素が多含まれている。したがって、②を使えばCCをUDCやBCから区分することができる。

一方、上記の意味のファセットは、単一の要素から成る記号をもつ分類法にも採り入れることは可能であるし、実際に存在する。現実の分類法は理想的なファセットで構成されているとはいえないが、理想的なファセットのみで単一の要素から成る記号をもつ分類法を構築することも可能である。それは、区分特性を順番に適用していけばよい。区分特性が適用されるたびにファセットが形成される。そして記号が末尾から順に細分されていく。この記号は末尾だけが細分されるので、単一の要素から成る記号である。したがって、②の特徴だけではCCを単一の要素から成る記号をもつ分類法から区分することはできない。

さらに、合成ができるかどうかというだけでは、CCを他の分類法から区分することができないことはすでにI章で述べた通りである。ほとんどの主要な分類法が合成の機能を備えている。もちろん、CC以外の現実の分類法は理想的なファセットで構成されていないのでファセット分析には適しておらず、分析合成という点ではCCが最も優れている。しかし、上記のように理想的なファセットのみで単一の要素から成る記号をもつ分類法を構築することが可能であり、そうした分類法ならば分析合成の機能を十分に持たせることができる。

以上、各種分類法を区分する観点として、①複数の独立の要素から成る記号を採用している、②記号の各要素がファセットを構成している、③分析合成ができる、があることを見た。

①を使えば、CC、UDC、BCのグループと、DDC、ECなどのグループに区分することができる。筆者は前者のグループを多次元構造分類法、後者のグループを階層構造分類法という名称で呼んでいる⁵⁸⁾。区分特性を独立に適用してできる構造が多次元構造で、区分特性を順番に適用してできる構造が階層構造である。記号が独立した要素から成るか単一要素から成るかは、区分特性を

独立に適用するか順番に適用するかを反映した結果である。

②を使えば、CCと、UDC、BC、DDC、ECなどのグループに分けられる。前者がファセット化分類法で、後者は非ファセット化分類法ということになる。ただし、前者にはCC以外にも、BCの第2版（Blissの死後、Millsらが編纂）やCRGによる各種ファセット化分類法が存在する。さらに、単一の要素から成る記号をもつ分類法でもファセット化分類法に成りうることはすでに述べた通りである。

③のうちの合成に注目すれば、合成ができる分類法と合成をしない分類法に区分できる。筆者はこの区分を合成表示の分類法と列挙表示の分類法という名称で呼んでいる⁵⁸⁾。ファセット化分類法は②に基づく区分であるから、この③に基づく合成表示の分類法とは区分の観点自体が異なる。また、①に基づく階層構造の分類法とこの③に基づく列挙表示の分類法を同義とみなす見解もみられるが、こちらも分類法を区分する観点が異なるのであるから同義ではない。一方、合成ではなくファセット分析を重視するなら、それは②を使った区分ということになる。

I章で見た、分析合成型分類法とファセット化分類法を同義とみなす考え方は、各種分類法を区分する観点到混乱があるように思われる。Ranganathanはある程度それに気づいていたように思われるが、自らが使用してきた分析合成型分類法という用語（CCを開発した当時としては他の分類法から区分する適切な表現であったと言える）とCRGによって普及されたファセット化分類法という用語が混在する渦中にいたために、落ち着いた整理ができなかったのではないだろうか。

謝 辞

亜細亜大学の長田秀一氏には原稿をお読み頂き多くのご意見とご指摘を賜りました。筑波大学中央図書館および図書館情報学図書館には資料入手でお世話になりました。また、本研究はサバティカル期間中に行ったもので、その間、筑波大学図

書館情報メディア系の先生方には筆者の業務を負担して頂きました。皆様に深くお礼申し上げます。

注・引用文献

- 1) Taylor, A. G.; Joudrey, D. N. *The Organization of Information*. 3rd ed., Libraries Unlimited, 2009, 512p.
- 2) Rowley, J.; Farrow, J. *Organizing Knowledge: An Introduction to Managing Access to Information*. 4th ed., Ashgate, 2008, 367p.
- 3) Chan, L. M. *Cataloging and Classification: An Introduction*. 3rd ed., Scarecrow Press, 2007, 579p.
- 4) Batley, S. *Classification in Theory and Practice*. Chandos Publishing, 2005, 181p.
- 5) Dewey Decimal Classification and Relative Index. 17th ed., Forest Press, 1965, 2 v.
- 6) Tennis, J. P. "Comparative modeling of Vickery's faceted classification and oeuvre of S. R. Ranganathan". *Facets of Knowledge Organization: Proceedings of the ISKO UK Second Biennial Conference, 4th-5th July 2011, London*. Gilchrist, A.; Vernau, J., eds. Emerald, 2012, p. 301-313.
- 7) 緑川信之. ファセット概念の源流. *日本図書館情報学会誌*. 2013, vol. 59, no. 1, p. 17-31.
- 8) Ranganathan, S. R. *Classification and Communication*. University of Delhi, 1951, 291p.
- 9) Ranganathan, S. R. *The Colon Classification*. Rutgers University Press, 1965, 298p.
- 10) Ranganathan, S. R. *Prolegomena to Library Classification*. 3rd ed., Asia Publishing House, 1967, 640p.
- 11) Bliss, B. C. A modern classification for libraries, with simple notation, mnemonics and alternatives. *Library Journal*. 1910, vol. 35, p. 351-358.
- 12) Bliss, B. C. *The Organization of Knowledge in Libraries and the Subject Approach to Books*. Wilson, 1933, 335p.
- 13) La Barre, K. "Bliss and Ranganathan: Synthesis, synclonicity or sour grapes?". *Dynamism and Stability in Knowledge Organization: Proceedings of the Sixth International Conference of the International Society of Knowledge Organization (ISKO), 10-13 July 2000, Toronto, Canada*. Beghtol, C.; Howarth, L. C.; Williamson, N. J., eds. Ergon Verlag, 2000, p. 157-163.
- 14) Ranganathan, S. R. *Prolegomena to Library Classification*. Madras Library Association, 1937,

- 305p.
- 15) Ranganathan, S. R. *Colon Classification*. Madras Library Association, 1933, 3 pts. in 1 v.
 - 16) メカノは、19世紀末にイギリスで考案され、1901年に設立されたメカノ社が販売した玩具。会社は転々としているが、現在でも販売されている。
 - 17) ここでの基本カテゴリーという用語は、後のPMESTという五つの基本カテゴリーとはまったく関係がない。
 - 18) Bliss, B. C. *The Organization of Knowledge and the System of the Sciences*. Henry Holt and Company, 1929, 433p.
 - 19) Bilss, B. C. *Review: Prolegomena to Library Classification*. *Library Quarterly*, 1938, vol. 8, no. 2, p. 299-303. この書評の中で、Blissが使用している用語のCoordinationとSubordinationを、RanganathanはArrayとChainという用語に置き換えていることも指摘している。
 - 20) *Oxford English Dictionary* のオンライン版によると、Trainには「A sequence, series, etc., with composition potentially or explicitly specified.」という意味がある。http://www.oed.com/view/Entry/204407?rskey=cMDOyR&result=2&isAdvanced=false#eid, (accessed 2012-11-19). 単なる列というよりは、何らかの関連をもった要素の列という意味合いがあるので、「一連の関連する(区分特性)」と訳すのが正確と思われるが、用語として馴染まないので、「(区分特性の)系列」と訳すことにした。OEDでのこの意味については慶應義塾大学の田村俊作氏のご教示による。
 - 21) Campbell, D. J. "Glossary to Dr. Ranganathan's paper". *Proceedings of the International Study Conference on Classification for Information Retrieval held at Beatrice Webb House, Dorking, England, 13th-17th May 1957*. Aslib, 1957, p. 13-14.
 - 22) Ranganathan, S. R. *Colon Classification*. 2nd ed., Madras Library Association, 1939, 4 pts. in 1 v.
 - 23) Ranganathan, S. R. *Library Classification: Fundamentals & Procedure, with 1008 Graded Examples & Exercises*. Madras Library Association, 1944, 496p.
 - 24) Palmer, B. I.; Wells, A. J. *The Fundamentals of Library Classification*. George Allen & Unwin, 1951, 114p. この著作の書名にもFundamentalsが使われている。
 - 25) Beghtol, C. 'Facets' as interdisciplinary undiscovered public knowledge: S. R. Ranganathan in India and L. Guttman in Israel. *Journal of Documentation*, 1995, vol. 51, no. 3, p. 194-224.
 - 26) 山田常雄. イギリス分類研究グループ(CRG)における分類理論の展開. 分類と索引とデータベース: 山田常雄氏追悼論集. 学術文献普及会, 1990, p. 1-111.
 - 27) Justice, A. "Information science as a facet of the history of British science: Origins of the Classification Research Group". *Proceedings of the 2002 Conference on the History and Heritage of Scientific and Technological Information Systems*. Rayward, B.; Bowden, M. E., eds. *Information Today*, 2004, p. 267-280.
 - 28) Ellis, E. J. An application of the Colon technique. *Library World*, 1951, vol. 53, p. 180-182.
 - 29) Ranganathan, S. R. *Elements of Library Classification: Based on Lectures Delivered at the University of Bombay in December 1944*. N.K. Pub. House, 1945, 112p.
 - 30) Ranganathan, S. R. *Colon Classification*. 3rd ed., Madras Library Association, 1950, 4 pts. in 1 v.
 - 31) メインクラスやカノニカルクラスのClass(頭文字が大文字)は「クラス」と訳し、その他のclass(すべて小文字)は「区分枝」と訳した。
 - 32) *The Royal Society Scientific Information Conference, 21 June-2 July 1948: Report and Papers Submitted*. Royal Society, 1948, 723p.
 - 33) 丸山昭二郎ほか. *情報社会の図書館*. 丸善, 1982, 302p.
 - 34) Ranganathan, S. R. *Prolegomena to Library Classification*. 2nd ed., Library Association, 1957, 487p.
 - 35) Ranganathan, S. R. Self-perpetuating scheme of classification. *Journal of Documentation*, 1949, vol. 4, no. 4, p. 223-244.
 - 36) Ranganathan, S. R. *Philosophy of Library Classification*. Ejnar Munksgaard, 1951, 133p.
 - 37) 前項のSelf-perpetuatingでも、“WellsとPalmerが私と一緒に、ファセット式の案出とファセット内の細目の列挙に着手した”³⁵⁾[p. 229]と書かれていたが、このPhilosophyでも“ファセット式を構築する際に、逆順配列の原理(Principle of inversion)が心に浮かんだ。この原理は、A. J. Wells氏とBernard I. Palmer氏、それに私が1948年の7月に、いくつかの新しい主題をファセット式に適合させる問題を解こうとして、日曜日を一日中ロンドンのチャーサーハウス[ホテル]で過ごしていたときに発見した”³⁶⁾[p. 54]と述べている。
 - 38) Ranganathan, S. R. *Classification, Coding and Machinery for Search*. UNESCO, 1950, 58p.
 - 39) 他の手段について説明はないが、Timeの細目を表現する記号にはアルファベットと数字を組み合わせて使い、Spaceの細目を表現する記号に

- は数字のみを使う、という意味だと思われる。
- 40) Ranganathan, S. R. "Colon Classification and its approach to documentation". *Bibliographic Organization: Papers Presented before the Fifteenth Annual Conference of the Graduate Library School, July 24-29, 1950*. Shera, J. H.; Egan, M. E., eds. University of Chicago Press, 1951, p. 94-105.
- 41) Ranganathan は後に次のように振り返っている。"シカゴ大学の Graduate Library School からの、1950年7月の第15回年次大会への参加の招待が、Colon Classification に存在する硬直化について考える機会を与えてくれた。これが、五つの基本カテゴリー PMEST (Personality, Matter, Energy, Space, Time), ラウンド, レベル, 一般化されたファセット式といった概念による、いくつかの硬直化の除去に導いた。…Colon Classification の第4版(1952)はこれらの考えを取り込んでいる"⁹⁾[p. 18].
- 42) Ranganathan, S. R. *Colon Classification*. 4th ed., Madras Library Association, 1952, 4 pts. in 1 v.
- 43) Ranganathan, S. R. *Colon Classification*. 5th ed., Madras Library Association, 1957, 3 pts. in 1 v.
- 44) Classification Research Group. The need for a faceted classification as the basis of all methods of information retrieval. *Library Association Record*. 1955, vol. 57, p. 262-268.
- 45) Ranganathan, S. R. "Library classification as a discipline". *Proceedings of the International Study Conference on Classification for Information Retrieval held at Beatrice Webb House, Dorking, England, 13th-17th May 1957*. Aslib, 1957, p. 3-14.
- 46) Ranganathan, S. R. *Elements of Library Classification: Based on Lectures Delivered at the University of Bombay in December 1944, and in the Schools of Librarianship in Great Britain in December 1956*. 2nd ed., Association of Assistant Librarians, 1959, 108p.
- 47) Ranganathan, S. R. *Colon Classification*. 6th ed., Madras Library Association, 1960, 3 pts. in 1 v.
- 48) Ranganathan, S. R. "Library classification on the March". *Essays in Librarianship in Memory of William Charles Berwick Sayers*. Foskett, D. J.; Palmer, B. I., eds. Library Association, 1961, p. 72-95.
- 49) Ranganathan, S. R. *Elements of Library Classification: Based on Lectures Delivered at the University of Bombay in December 1944, and in the Schools of Librarianship in Great Britain in December 1956*. 3rd ed., Asia Publishing House, 1962, 168p.
- 50) Ranganathan, S. R. "Depth classification, tools for retrieval, and organization for research". *Documentation and Its Facets: Being a Symposium of Seventy Papers by Thirty-two Authors*. Ranganathan, S. R., ed. Asia Publishing House, 1963, p. 604-621.
- 51) Ranganathan, S. R. Subject heading and facet analysis. *Journal of Documentation*. 1964, vol. 20, no. 3, p. 109-119.
- 52) Ranganathan, S. R. "Library classification through a century". *Classification Research: Proceedings of the Second International Study Conference held at Hotel Prins Hamlet, Elsinore, Denmark 14th to 18th September 1964*. Atherton, P., ed. Munksgaard, 1965, p. 15-35.
- 53) Ranganathan, S. R. "General and special classifications". *Classification Research: Proceedings of the Second International Study Conference held at Hotel Prins Hamlet, Elsinore, Denmark 14th to 18th September 1964*. Atherton, P., ed. Munksgaard, 1965, p. 81-93.
- 54) *Indian Standard: Glossary of Classification Terms*. Indian Standards Institution, 1964, 110p.
- 55) Ranganathan, S. R. *Colon Classification Ed 7 (1971): A Preview*. Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 1969, 52p.
- 56) 順序の値はもつが意味をもたない空記号 (Empty digit) を使って、意味をもつ記号の基底の数を増やす方法。たとえば、分類記号 (意味をもつ記号) の基底としてアルファベットの小文字 a…z, アラビア数字 1…9, アルファベットの大文字 A…Z が使われているとする。このままでは基底の数は $26+9+26=61$ である。ここで、各記号系の最後の記号 (z, 9, Z) を空記号として使うことにする。また、0 も空記号とする。空記号を使って新しい基底が作成できる。すなわち、00a…00y や 001…008, 0za…0zy, Z9a…Z9y などである。00, 0z, Z9 などは空記号で意味をもたないが、00a と 0za, Z9a をそれぞれ区別するために使われる。同じ空記号を使ってできる一組の基底、たとえば 00a…00y をセクターと呼ぶ。(Prolegomena 第3版¹⁰⁾, p. 238-240, 244.)
- 57) Ranganathan, S. R. *Colon Classification*. 7th ed., Volume 1: Schedules for Classification. Gopinath, M. A. revised and edited. Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 1987, 332p.
- 58) 緑川信之。分類法の構造: 階層構造と多次元構造。図書館学会年報. 1996, vol. 42, no. 3, p. 99-110.

要 旨

【目的】 本研究では、Ranganathan の著作におけるファセット概念の変遷を検討した。

【方法】 Ranganathan の著作を発表年順に逐次的に分析した。

【結果】 Ranganathan の「ファセット」に関わる著作は3期に分けられることがわかった。第1期はファセットおよびファセット式概念が確立されていく過程である。Colon Classification (CC) は、(1) 複数の独立の要素から成る記号を採用している、(2) 各要素がファセットを構成している、という二つの特徴をもつことが明らかにされた。第2期は基本カテゴリーの考えが変遷していく過程である。初期の頃は、基本カテゴリーには、初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を想定していた。詳細かつ複合的な主題に対応する必要性が高まり、多数のファセットを少数の基本カテゴリーから体現させるという新しい役割が与えられた。しかし、基本カテゴリーの活用は分類作業の一貫性が保てなくなるという新たな問題を生じさせた。この問題に対して、第3期にRanganathan は公準と原理を用いるという解決策を提示している。この時期には、ファセット化分類法と分析合成型分類法との関係や、既存の分類法におけるCCの位置づけを明らかにする試みも行われたが、どちらも著作によって考えが変化している。これは、CCの二つの特徴(1)(2)、および、(3) ファセット分析と記号の合成ができる、という三つの観点をRanganathan が明確に区別できていなかったことに原因がある。